
You and I.

詩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You and I.

【Nコード】

N3344A

【作者名】

詩斗

【あらすじ】

好きな子にフられて傷ついた心を癒そうと住み慣れた関西を離れ1人、東京へやってきた主人公…錦戸大樹。ひょんなことから、Dach Gartenというホストクラブでホストをするハメに？！
そんな彼の日常を追ってみました。そんな話です……多分。

第1話

カラ……ン、と。背後でドアの開いた音がした。

俺はその音を聞いてすぐさま振り返り、入ってきたお客様に丁寧に挨拶をする。普通、というか、他店では、お客様の出迎えとかはきっとボーイの子がするんやろうけど、ちょうど俺はお客様を送ったとこでドアのそばにおったし。大体、うちの店は、これはボーイがするべき仕事、これはホストがするべき仕事、なんちゅー細かいことは決まってへん。お客様が来たらお客様のついていない者はまづご挨拶。これが基本。つーか常識。

お客様は神様やからね。オーナーの格言やけど。

「いらっしやいませ。Dach Gartenへようこそお越しくださいました……って、あ、サクさんだー。また来てくれたんですね、いつもありがとうございます」

「ふふふ、タイキが出迎えてくれるなんてこれが初めてじゃないかしらね」

「そ？　サクさんさえ指名してくれば、これからは俺がお出迎えするけど？」

「そうねえ。じゃあ他のお客がついてないときはお願いするわ」

「うん、じゃなかった、はい、承りました。ではでは、こちらへどうぞ」

くすくすと笑うサクさんに俺は恭しく片腕を差し出した、もちろんサクさんを席へエスコートするために。サクさんから受け取ったコートはそばに控えてくれていたボーイの子に預け、俺はサクさんを奥のソファに導いた。

「You and I 01.」

「それでサクさんがな、俺と拓斗が知り合いやって聞いた途端“もう一回会いたい”って言い出すねん。誘惑して連れて来いとまでゆわれたし。俺らの立場ないやんなあ。全部拓斗の所為やからな」

『あっはっは！ それはホスト冥利に尽きるなあ』

電話の相手は京都に住んどる川島拓斗、俺の中学時代からの悪友や。拓斗は、もともと愛なんてモンは信じないぜーというDach GartenのNo. 2ホストやってんやけど、ある出来事がキツカケで考えを180度転換、今は離れられない大事なものを見つけて京都に戻つとる。若干20歳のくせに綺麗な奥さんと可愛い子供との3人暮らし。ほんと腹立つ。

いや、それにすすんで手え貸したんは俺やけどさ。

んで、拓斗が住んどったマンションを家具やスーツごと俺が借りうけて、以前の拓斗と同じようにDach Gartenでホストをしとるっちゅーわけ。もちろん俺は愛なんて信じないぜーなんちゅう人間やないけどな。

『けどさあ、正直僕、サクさんでどんな人か覚えてないんだよね』

「うっわ最悪……。なんなんそれあかんやろたくちゃん！ お客様の名前くらい覚えてんとNo. 2ホストなんて務まらへんっしょ！？ むしろキープできないっしょ！！」

『たくちゃんいうなや馬鹿拓斗っ！ 全く……。あいな、僕はもうホストやないし、第一芽夢がいるから、もう会うことのないお客の名前なんて覚えとく必要はないんねん。それでも事実そのNo. 2キープしてたっつーの。っーか、あんなにお客来んのに、お前よく名前覚えられんなあ。そっちのがすごいわ』

うん？ 俺の勘が確かならば……。何気なく惚気やがったなこいつ。ああやだやだ、俺の前では芽夢ちゃんっちゅー言葉は禁句やっつ。しかもお前の口からは特にな！ んなこと全く気付かせへんけどさあ。根がいい人やし、俺。

「ふふん、褒めろ褒めろ！ なんつっても俺の天職やからねー。名

前くらい楽勝で覚えられる」

『はっ、なに調子こいてんだか』

「うっさいなあ。まあ別にええけど？ 拓斗の常連さんには包み隠さずぜんぶ話しちゃったもんねーだ」

『話したってなにを？』

「ふっふっふ……。たくちゃんにはー、現在芽夢ちゃんというそれは素晴らしい奥さんと愛里ちゃんという可愛らしいお子さんがいるのですってね！ だから拓斗のことは諦めてください、と」

『またそんなどうでもええことを……。』

「どうでもよくなかないし？ 俺は拓斗に負けて芽夢ちゃんにフラれたからこっちに來たんや。ってゆうたらみんな同情してくれてな、話が盛り上がんねん！ しかもそんな話したからか、次から俺を指名してくれるお客様多いねんよね」

『そんなことで客寄せしてどーすんだよ、ほんま馬鹿やなあ。そんなにで客とるなら他のホストに反感かってんじゃないん？』

「残念でした。話はいくまでもキツカケであるわけで、指名してもらえるようになるんは俺の実力。しかも実力やってことちゃんとマサキさんに認められてるから反感なんかかってませんー。拓斗じゃあるまいし」

『最後の一言が余計やけど、へえ、マサキさんがなあ。めっちゃ意外、あの人結構好きが激しいって思ってたんやけど』

「どうゆう意味やねんそれ」

『ま、気にするな。独り言だ。あ、今度マサキさんに礼をゆつといてや。最後の最後に会えんでゆえてないねん』

「ん、りょーかい！」

電話を切って、一息つく。うーむ、やっぱ拓斗、ずいぶん性格変わりのようだなあ。

拓斗は京都を出てからずっとこうゆう仕事をしてて、それでも人当たりはあんまりよくなかったって、俺がこの店で働きた当初はホスト内とかお客さんとかの間では評判やった。そういう男がい

いっていうお客さんも多くてNO.2キープしてたみたいやけど。
今？ 今はもちろんマイホームパパっちゅーことで噂はおちついとる。なんせこの俺が、その話が出るごとに現在のたくちゃんについて事細かに詳しくあることないこと説明したってるから！ あ、いやがらせやないねんで？ 礼やねん、あの山盛りのスーツくれた。ほんま驚かれるねんなー、あいつが笑うなんて信じられへん……！！ みたいな。

—— いっぺん東京住みんときの拓斗を拝んでみたいもんやわ。今はそばに芽夢ちゃんがいってくれてるからか、大分ってかかなり丸くなったんやけど、昔はほんま、なんちゅーか“近づく……切る！！”みたいなオーラを醸し出した。それもまた中学生時代から。すごいよなあ。たくちゃんは。

そんな拓斗をずっと想いつづけてた芽夢ちゃんもすごいと思うけどな。

……っと、こらこら、いまはまだ二人のことを深く考えちゃいかんぞー俺。この気持ちはまだ消えてへんのやからな。

「さてっと、そろそろ風呂入って寝ないかんか」

時計をちらっと確認する。明日は幸い3限だけやから充分寝れるわ。ここんとこ満足に寝れてへんかったからちよいどいい。ゆっくり寝たろ。何もかも忘れるくらい。

俺は、1人暮らしにしては贅沢すぎる大きな大きな湯船に身を沈め、ゆっくり浸かって身体をあっためた。1時間も入って身体がポカポカしてきたら頃合。風呂から出たら即着替えて体が冷え切らんうちにベッドに潜り込む。これが俺の最近ハマってることの1つ。もちろん最初は寒いけど、すぐに温なるし、意外と眠気を呼び寄せるんに最適な行為やねんで？

それでも、今日に限ってはなかなか眠気がやってこなくて。

「ったくも……。珍しく、拓斗から連絡してくるから」

ホストという商売柄、俺が家に帰りつくんは日付が変わったあと

であることが多い。今日も今日とて当たり前のように2時ちよつと前に家に帰ってきたのに、家に帰って一息ついたところでタイミングよく電話が鳴り出した。こんな夜中にかけてくるんは拓斗しかおらんから、普通に出了けど。

ここんどこ連絡いれてんかったから、心配してくれたんやろか。うーん。。なんかそれはない気がする。芽夢ちゃんはともかく拓斗はわざわざ連絡なんかせんやろ。さては拓斗のやつ、芽夢ちゃんにゆわれて連絡よこしたな？ 尻に敷かれてるってほんまやねんなあ……。

……あかん、また考えたらいかんことを考えはじめとる。落ち着いて眠りにつこう。

そう思ったけれど、1度浮かんだ考えは早々沈んではくれなくて。

結局は、寝入るまでずっと、悶々と考え続けるはめになった。

第2話

俺が、はじめて拓斗と芽夢ちゃんに出会ったんは、ちょうど10年前の秋。小学校5年生のとき、当時社長やった父さんに連れられて、兄貴と3人で養護施設『愛の園』ってどこに行ったんや。近い将来どちらかの手に委ねられるであろうからよく見ておけ、という父さんの意図からの出来事やった。

その時やで。俺が、拓斗と芽夢ちゃんを見つけたんは。

「You and I 02.」

拓斗は相変わらずあの仏頂面で走りまわって、芽夢ちゃんはずっとその拓斗の後ろをついていって。拓斗がなにをしても、なにをやらなくてもずっとにこにこして後ろから芽夢ちゃんがついてく。そんな関係がうらやましくて、ちよつと妬ましかった。

俺はその時、すでに将来トップに立つ者としての教育を受けとった。勉強はもちろん運動全般も、雑学全般も、父さんが必要やと思っただもんは全てやらされた。そんな生活やったから、俺や兄貴には、本当に親しい友達とか出来なかってん。兄貴は別にそれでも構わないうって思っと思ったみたいやねんけど、俺はすごい淋しかったんよ。

ずっと心のうちに燻っていた願い。誰にもいえなかった願い。目の前で形となったもんをみつけて、あいつらがほんま羨ましかった。俺もあんなふう友達と走り回ったり、悪戯したり、転げまわって笑ったりしたかった。やることやみるところがあらかじめ決められとって、それが終わったらすぐに家に戻って勉強、みたいな殺人的スケジュール。やから、拓斗と芽夢ちゃんに話しかける余裕なんてなかった。あいつらはこの時のこと絶対に知らないな、覚えてへん。

これは、俺だけの記憶。

そんなこんなであいつらのことはすごく印象に残ってて、こう、自分の願いが形になって、触れる距離にあるのに触れない、みたいなノリ。もういてもたってもいられなかった。すぐに父さんに直談判して、まあ詳しい経緯は省くけど、自分の行きたい学校に入れることになった。親父の資産はなにからなにまで兄貴に譲って、俺には譲らないって条件で。

その程度のことなら平気やったし、とりあえずは成人、というか大学卒業するまでは面倒をみてくれるみたいやし、拓斗と芽夢ちゃんとの輪の中に入れるんやったら、そんなんは安いくらいやったんよ。俺の性格やったらね、企業のトップに立つとかには向いてないねん。兄貴はすでに社長の座を譲られとって、しかもうまく事業を拡大していつとる。兄貴が手腕をもつとるから、約束はいまだに守られとって、俺はこうやって勝手に東京に出てきたり、ホストとかできたりしてるわけ。兄貴様様やで、ほんま。

それからしばらくして、俺がずっとずっと待ち望んどった、中学校の入学式の日がきた。俺はめっちゃ偶然を装って拓斗に話しかけてん。案の定、拓斗はものすごく胡散臭げに俺のことをみてて、その目を俺はよう覚えとる。眼力っていうんかな。そういう、目から発せられるオーラみたいなもんがめっちゃ怖かった。それでも、ここで引き下がったら俺の負けや。願いは永遠に叶わなくなる。せやからぐつと我慢した。

同じクラスやったことが功を奏したんか、拓斗の警戒心もすぐにとけて仲良くなれた。すぐに……ちゅうのはすこし間違っとなるけど、まあええねん。およそ1年半や。あの『愛の園』に初めて行った日から、初めて拓斗と芽夢ちゃんに出会った日から1年半。1年半も我慢した俺にとって、1ヶ月やそこら警戒されたままとか、全く苦にならんかった。

拓斗と仲良くなるにつれて、芽夢ちゃんとも仲良くなれてんなー、そういうえば。芽夢ちゃんは拓斗の馬鹿と違ってめっちゃくちゃ社交的

な子やから、俺としてはすぐに仲良くなる予定やってんだけど、拓斗が俺を警戒しよった所為で芽夢ちゃんと口利かせてくれへんかってんや。なにもあそこまで芽夢ちゃん護ることあらへんのに――。しかも本人は無自覚ときたもんや。拓斗にはそんな自覚なんてないって気付いた瞬間、ああ負けたって思った。

2人とどんどん仲良くなってく過程で、俺はどんどん芽夢ちゃんに引き込まれていった。芽夢ちゃんは優しくて、かっこよくて、それでも自分の意見はきっちりゆうて、そういうきっぱりしたところにどんどん引かれた。芽夢ちゃんは傍からみても拓斗好き好きオーラを出しすぎとって、知らぬは拓斗だけなり、みたいな感じやったから、俺はやっぱ悔しくて、どうにか芽夢ちゃんにこっち向いてもらおって必死やった。拓斗の無自覚な行動に氣い付いてからは、半分意地やったなあ。芽夢ちゃんはお前のこと好きなんやでーとかさり気なくけしかけたったのに、それでも氣付かへんし。拓斗が芽夢ちゃんの気持ちに氣付いたんは芽夢ちゃんから面と向かって告白されてからやで？　ありえへん。中学校や高校ではあいつら付き合っとりって噂流れてたのに氣付かんし。

俺もなあ、あのまま2人が幸せやったらべつにもーいいやつて思ってたんやな。芽夢ちゃんは好きやけど、拓斗かて大事な友達やったし。どっちも失いたくなんてなかったから、どっちとも友達でいれるこの立場を選んだのに。

結局拓斗は高校を卒業してから東京に出てしもて、そのときに芽夢ちゃんも置いていった。どうしても許せんくて、泣かせたなくて、こんなんやったらいっそのこと芽夢ちゃんを奪い取ったろって思ってたんやけど、芽夢ちゃんはそれでも拓斗のことずっと好きやってゆうて、俺にはやっぱり、なんもできへんかった。情けないけどな。やから『愛の園』の先生が入院したって聞いたとき、ほんまに最低やと思っただけど、使える……って思たんや。その時拓斗は俺のおじさんが管理人しとるマンションに移ってきたし。ちようどいいって思っただねん。

父さんと兄貴に事情話して、協力してもらうことにした。そのころは父さんも町長ゆーことで大分人間が丸くなっとったし。父さんに芽夢ちゃん気に入ってもらったフリして、結婚ほのめかせてもらった。『愛の園』のこと条件に持ち出したら、芽夢ちゃんはずぐさま了承したんやって。芽夢ちゃんが結婚すると知ったら絶対に拓斗は飛んでくると思った。それでもその連絡をする前に先生からの小包で飛んで帰ってきよったけど。

初めて会ったあの時から、芽夢ちゃんの間目も、拓斗の間目も、お互いにしか向けられてなかった。ただ、拓斗が愛というキモチに対して臆病やっただけや。臆病で、手を出せんくて、その結果芽夢ちゃんを悲しませて。芽夢ちゃんを泣かせたっちゅー行動を、俺は許せんかったんや。

ま、許せんかったけど、顔を1発殴っただけで勘弁したった。あーもー俺は優しいな……。渾身の1発で、結婚とかそうゆうの、全部チャラにしたってんで？ そら確実に、お得意やろ。

もちろん『愛の園』にも今後力入れていく予定。ここらへんは兄貴にお任せや。

わかってたことやけど、芽夢ちゃんは拓斗をとって、拓斗は芽夢ちゃんをとって。それが2人の幸せになるんやったら、俺はいいや。そう思ったんは、確か。2人が並んで幸せそうに笑いあっているとかみても、長い間芽夢ちゃんを想ってた俺の気持ちは消えんかったけど。いまだにくすぶつとる芽夢ちゃんへの気持ち。早く消してしまわな、な。実は、その為に東京に出てきたたっていつでも過言ではない。もちろん、あの2人を冷静に見る勇気がないってこともあったけど。

——拓斗がここ引き払って京都に戻ったとき、最初は俺の住んでいたマンションに住んでたんよ。その時、俺は部屋中に盗聴器でも仕掛けて、芽夢ちゃんと拓斗が2人きりになって妖しげな雰囲気になってもなったら、もうソッコー電話かけて邪魔したとか本気で思ってたけど、なんか直前で馬鹿らしくなってやめた。しかも俺、他

に女がおるから芽夢ちゃんとは本気じゃなかったってことになって、これまたややこしいねん、うん。ま、こっち来てすぐに別れたってことにでもすればえっか。

そんなことをうだうだ考えているうちに眠気はやってきていたみたいで、気付いたときはもう昼近くやった。うわーやばいやばい、さっさと準備せな講義に間に合わへんっちゅーの！　これで遅れたら拓斗の所為やからな、もう！

第3話

とっても大好きな人が、いた。

その人だけが、親にも親戚にも、友達にさえも見捨てられた私をみてくれた。

唯一の、誇りだった。それはとても心地よくて、快くて。

それでも、そんなのは幻想に過ぎなくて。

「You and I 03.」

急ぎ足で学校に出向いて、ちょうど敷地内に入ったって時に親友からメールがきた。学校にいるなら今すぐ来い、みたいなメールで、俺も別に用事なんてなかったし、早足で待ち合わせの場所に向かう。もちろんそいつはもう来てて、みつけたと同時に俺はそいつに抱きつきつつ、現在の心境を伝えてみた。

「かつくんおはよー！ あー……眠い……俺は眠くて死にそうなんだー」

「来たばかりでなあに言っただよお前はさ。俺なんて1限から来てるんですけど。お前は全然寝れてるほうだったの。それともなにか？ また例の仕事が長引いたとかか？」

「うーん、そうともいう、かも」

「なーに疑問系で答えてやがんだ」

抱きついた俺を無情にも剥ぎ取りつつ、そういつてかつくん、もとい刈田忠久は、俺のつけたあだ名にも負けないくらいの快活さで大笑いした。俺、なんか笑われるようなことゆったかな。ゆってないよな。確実にゆってない、うん。人が真剣に話してるってのに、

かっくんめ、笑うことないじゃんよ。

自分でも少し大げさやろって思うくらい思いつき、ぷいっとい
う効果音が必要なくらいの速度で俺はかっくんから視線を逸らした。
一応笑われて不機嫌なんやでーというところをアピールしているつ
もり。ま、かっくん相手にはこの程度のイヤミなんて聞くわけもな
い。

「で、大樹は眠い眠いってたくせに俺が笑うと怒るんだな」

「かっくんは失礼だよねー。俺なんも笑うようなこといってないだ
ろー」

「語尾は伸ばすなみっともない。俺が笑ったのはお前がどうこうっ
てことじゃない。気に障ったなら謝ってみるけど？」

「謝ってみるけど、じゃなくて、普通に謝れよな。全く」

「そりゃ悪かったな」

相変わらずかっくんは笑ったままだ。俺は懽然とした態度を崩さ
ないまま、かっくんと並んで構内に入っていく。

やっぱさ、あれなわけよ。かっくんは俺の親友であるくらいやね
んから、もちろん美男子の部類。最初にかっくんと会ったときは絶
対休み時間は中庭かなんかで本とか読んでる、趣味は絶対クラシッ
ク鑑賞やろ、みたいな雰囲気醸し出してたわけね。実際に仲良く
なってみるとそれはもう見事に正反对で、ノリノリでロックとかき
くし、読書は好きだけど大部分は漫画だったり、サッカーでも野球
でもなんでもこいみたいなやつなわけさ。あのギャップにしばらく
俺はついていけなかった……。でもそんなギャップ、あったほうが
楽しいやん？ てことで変わらずその美男子系のかっくんと馬鹿騒
ぎして楽しんでんのよ、俺ら。

てゆうか俺やってホストやってるくらいやから顔はそこそいい
らしくってやね、俺とかっくんが一緒に歩いていると、周りの女の
子がざわざわする。今もそう、俺らが構内に入ってきた瞬間に中に
いた女の子とかがざわざわはじめた。俺もかっくんも、正直こう
いう雰囲気が大嫌いなわけ。見た目でしか人を判断せんくて、それ

でいて誰それはこうや、誰それはああや、みたいな噂を垂れ流していく人種。できればそんな人間には接触したくない。誰だってそうやろ。

ちらりとかつくんを見ると、かつくんも微かに頷いていて。俺らは不自然でないように構内から出ていった。

「はあ……まいったなあ。あれじゃまた今日も席は後ろになるな」

「この場合はもう仕方ないって。かつくんはあの雰囲気の中、前の席陣取る度胸ある？」

「ないな」

「だっしょ？ ま、座りっぱぐれない程度に空きはあるんでない？ 講義始まるまであと30分くらいあるけど、図書館かカフェテリアとかに行く？ 歩きっぱなしはさすがにきついでしょ」

「そうだな。ま、無難なところでカフェテリア？ 昼飯足りなくてさー、なんか食いたい」

「……そのちっこい身体のどこに飯が入るの？」

「簀巻きにして東京湾近郊に沈められんのと生きたまま切り刻まれて骨の欠片すら残らないほどにすり潰されてから日本各地にばら撒かれるのとどっちが好みだ大樹？」

「どちらも好みじゃないですすみません！ てかかつくん、にっこり笑いながらそうゆうことゆわんというて。本気怖いから。かつくんがゆうと冗談だって受け止められない」

「なに言ってるの？ 俺はいつだって本気だよ」

「怖っ！」

目元は真剣そのもので全く笑っていないくせに、それでいて見せ付けられるかつくんの最高の笑顔。これを見るヤツはきっと、みんなこう、背筋に冷たいものが走るということをリアルに経験できたんだろうなあ。……俺も含めて。

かつくんは、自分のスタイルに対してものすごいコンプレックスを持ってる。ま、ゆってしまえば、男子平均よりも少し、ほんますこーしだけやけど背が低いことを気にしてるんやね、なんとまあ可

愛らしい悩み。俺にとっては、かつくんがちっさかろうがおつきかろうが関係ないって再三ゆうてんねやけど。それでもやっぱ、今まで背の低さが原因でいざこざになったりしたことが結構あったらしくて、かつくんの悩みは根が深い。一応男子平均身長＋8cmくらいある俺には、その悩みを解決してやる！なんちゅう失礼なことはゆえへんわけ。

——かつくんくらいちっさいのんも、俺は結構可愛いと思うんやけどなあ。

とりあえずひたすらかつくんに謝りながら、カフェテリアに向かって歩く。機嫌が直りますようにとの願いを込めて、アイスやらパンやらを買いでみたり、紳士らしくかつくんの席をひいてみたりした。それでも、あくまでも無表情でパンを齧るかつくん。正直、素敵に怖いです。正直、なんだか泣きそうです。やけどここで諦めたらせつかく築いてきた友好関係にヒビが、とか思ってたひたすら俺は謝り続けて。講義が始まりそうになった頃に、なんとかかつくんの機嫌も浮上してきてて。

「あ、もう時間だな。行くぞ大樹」

かつくんのその一言で、俺はほーっと一息はいた。なんとかかつくんの機嫌も元に戻ってきたわけや。機嫌が斜めのあいだは、かつくんは怒ってんのを隠しもんから、俺も怖いし周りの他の子も怖いわけよ。かつくんは綺麗やし余計にな。んで、また俺に非難の目が来るわけよ。その要注意人物を軽々しく怒らせんなよ！みたいな俺かて怒らせたないわ。やけどあれやん、なんでか知らんけど、俺はたまにピンポイントで人のウィークポイントを突く体質らしい。しかも無自覚で。意識せず。そら怒られるよなあ。俺でも怒るわ。うん、ごめん……。これじゃ拓斗のことも怒られへんかも。

講義室についた。案の定、前とか真ん中あたりの絶好の席は全部取られとって、俺らは適当に空いていた後方の席に陣取った。3限の講師は、なかなか中身のある講義をしてくれる。構成もなかなかいいねーっちゅう感じやねんけど、字は小さいわ汚いわで俺的に

は結構嫌い。俺さ、なに書いてあんのかわからんのか、すっげえいらすんだよね。ほら、俺って綺麗好きだし神経質だから？
こういう気持ち、わかってくれる人結構多いと思うねんけど。まあそれをかっくんに話したときは、吹き出された上にそんなもんわかるかボケと拳骨を食らったけどさ。

なにげなくかっくんってノリツツコミ派だよねえ。いいコンビになれそう……。

3限が終わったとき、ほんま眠気はマックスで。絶えられないからとかっくんに断って即帰りました。家についたら一瞬で寝てもたびっくりだったなあれは。

そうゆうわけだから、気付かなかったのだよ。

遠くのほうから俺を見ている女の子の存在に。

第4話

家に帰って部屋着に着替えて、すぐさまベッドに横たわる。バイトはとりあえず後回し。眠気MAXで接客して、お客さんの前で眠りこけちゃったりとかしてみ？ 確実にマサキさんに殺される。確実に。絶対に。かつくんの言ってたやつが現実になる……！

俺はまだ簀巻きにされることなくバラバラにされることなく、平和に生きていきたいんわけよ。

バイトの時間まで5時間くらいは眠れるかもしれん。睡眠を要求してくるだるい腕を動かして目覚ましを探し出した。発見。あんな、何度も壁に投げつけて恐縮やねんけど、せめてあと1回は役に立ってな。

セツトしなおして目をつぶると、すぐに眠気はやってきて。

You and I 04.

——たららったったったくん

……んあ？ 俺、いまレベル上がった？ やりい。これで魔王の

城に入れる。おらー行くぜ仲間たちよ！ ついにラスボスだー！

あれ？ かつくんが魔法使いなん？ やだなー後ろからベギラマと

かされたら敵じゃなくて俺に当たりそう。イタっ、殴んなよなかつ

くん！ 杖って結構痛いんやからな！

——たららったったったくん

あ？ まだ敵と遭遇もしてへんのやけど、またレベル上がった？

おっかしいなあ。バグってんかな？ 仲間を振り返ってみるけど、

誰もレベルアップした形跡はない。なんやねん。なんの音？

やばっ、これメールの着信音やって！

意識が一気に覚醒した。がぼっと飛び起きると、サイドボードに置いとった携帯が連続して光った。え、マジすか。これ、メールじゃなくて電話やん！　なんで？　なんで？　いつのまに電話の着信音に設定とかされちゃってるわけ？？

とにかく俺は大慌てで携帯を引ったくり、出来る限りの速さで電話に出た。

「は、はい！　どちらさまですか！？」

『あ、タイキ起きてたかー？　俺、俺。D a c h　G a r t e n の正樹だけど、わかる？』

「え、マサキさん！？　ああわかりますわかります！　すいません。なんか深い眠りについていたみたいで」

『そーかー。深い眠りについたまま目覚めなくなるよりいいってことで、起こしちゃったのは許してよ』

携帯の向こうでケラケラ笑うマサキさん。まさか俺、寝過ぎしちゃったりしてる？　遅刻しちゃったりしてる？　そう思って時計をみたんやけど、実際まだ2時間くらいの余裕はあって。ほっと安心したら、その瞬間、急に頭が回り始めた。

マサキさん今日はどうしたんやろ。電話なんてそう頻繁にするような人やない。急ぎの用とかも、確実にメールで回す人やのに。緊急で連絡とりたときとかも出えへんし、それじゃ携帯持つ意味ないやんけってな具合。そんなマサキさんが、電話。これ、かなり珍すぎる。今日ホスト仲間に自慢したろーっと。いや、それよりもマサキさんから電話かけてくるくらい、なんか特別な用事があったんかな。

『おいこらタイキっ。ちょっと、聞してる？』

「……あ、ああ！　聞いてます、聞こえてますよ！　それでマサキさん。今日はなんの用なんですか？」

『全く聞いてねえじゃん』

大きな大きなため息が耳元から聞こえる。すんません、ちょっと考え事しとる間トリップしよって、回りの音がシャットアウトされ

てました！ 俺的に、こういうことは日常茶飯事といえるくらいよ
おあることやから、気にせんといてください！

バイト仲間やからっちゅー理由以上に、マサキさんのご機嫌を損
ねるといろいろとまずい。お返しとしてどんな報復があるかわかつ
たもんやない。そんなわけで必死で謝った。あーもーなんか今日俺
謝りっぱなしだよ。

「すいませんすみませんほんまごめんなさいっ！」

『あーもーいいって。謝りすぎんのも聞き苦しいぞお前』

「はいっ！？ ご、ごめんなさ……あ」

『今度その言葉を口にしたら店の屋上から逆さ釣りの刑な。もちろ
ん全裸で。お客さん落書きしほーだい』

「げっ、絶対嫌やし。りよ、了解ですっ」

『よーしよし、素直でよろしい。あ、んでさあタイキ。今日は俺の
お願い聞いてほしいんだけど』

「O・NE・GA・I！！！！」

あはは、はは。つつい癖で。驚きすぎた時の癖で、アルファベ
ット発音しちゃった。えへ！ あは！ まあ音的にはたいして変
わんないらしいし、マサキさんにも気付かれなかったみたいやし、
ぎりセーフ。マサキさんにおかしい人扱いされたらどこまでその噂
が流れるかなんてわからんからな、用心せんと。

じゃ、ないよ俺。傍若無人で言語道断な（そうですよちよつと4
文字熟語いつてみたかっただけですよくそつ）あのマサキさんが、
他人にお願いすることなんてあるん！？ 本気！？ ねえ、正気！
！？ ちょ、ちょちょ、ちょっとたくちゃん！ 俺、ここでどうい
う反応返しゃいいわけー！？ 一応先輩やろお前教えんかい！

なんていうか、驚きを通り越して呆然の域。そのまま長らく言葉
を一言も話せませんってな状態が続いたんやけど、その間もマサキ
さんは辛抱強く待っててくれたみたいで。俺は頭ン中が大体70℃
ぐらいに冷めてから、なんとか話しはじめること成功した。もちろ
ん100℃ん時は、頭がパニックってなにも考えられない時やで！

「お、おねが、お願いって、ま・じ・で・す・か？ マサキさん」
『あん？ お前、俺様がわざわざ電話までしてやってんのに冗談だ
と思うか？』

「全く思いません」

『即答しやがったなコノヤロウ。ま、いいか。そう、お願いがあんだよ。タイキに』

「で、では。その内容をお聞きしたいと存じますが……！」

『いきなり馬鹿丁寧になってんじゃねーっつの』

そこでマサキさんから聞かされたお願いっていうのは、マサキさんを知ってる人ならば、つまりホスト仲間であれば、大概の人間がおかしいって思うんじゃないかなあ。事実、知り合ってから数ヶ月しかたつとらん俺ですらおかしいって思うし。こんなことを、他の誰でもなく、俺に頼むこと事態が変やって思ったし。マサキさんだから、ね。

仕事のシフト、替わってもらってありますか？

なあんかマサキさんは、その日用事があるみたいで、今月の18日、シフトの交代頼まれてしまった。18日は俺も空きやし大学もなんもないからとりあえずはオッケーしたんやけどな。したらマサキさんに、今度奢るな！とかゆわれてもて慌てて断った。やって、どんな店に連れて行かれるかわからへんし。

ってか、シフト交代くらい俺らの間で日常的に行われてることなんやけど、マサキさんから聞くととなると、なあ。あの人が仕事休むなんて珍しい。俺と同様、マサキさんはホストを天職や、なあんて考えとるようなお人やから。まあ俺もマサキさんにとっては本当に天職や思うけど、そのマサキさんが休むなんてな。ほんまに不思議。摩訶不思議。世界七不思議に数えよう。どうでもええねんけど、世界7不思議って書いたらんか気持ち悪い。

いつもお世話になってるマサキさんへ、せめてもの恩返しをでき

る絶好のチャンスやねんから、俺的には全然構わないやけどさ。

マサキさんからの電話の後、脳内に寄生する魔法使いかつくんやスラリンやらを追い出すためにゆっくりめに風呂に入って、着替えて、現在バイトにでかける準備は万端。俺は、いくら休憩室みたいな場所があっても、店内で着替えるのんがなんかイヤやから、いつもスーツで出勤することにしとる。その上にトレンチコートみたいなんを着て、財布持って、携帯持って、家に鍵かけて、うん。準備はオツケー。

管理人である実の叔父さんに挨拶をしてみたいなんかしちゃってから、マンションを出た。俺は、こう、いかにも夜の男ですみたいな雰囲気醸し出してみたりなんてしつつ、D a c h G a r t e nに向かって歩き出した。

第5話

“彼”は今日、いるのかなあ？

会いたい、会いたい、会いたい、会いたい。所詮、偽者でしかないけれど。それでも、私にとっては本物。私にとっては、唯一のもの。一度も話したことがなくても、一度も側によったことがなくても、それでも。

それでも、いいから。

You and I 05.

「ようこそお越しくださいました、サークさん！」

「あらやだ。タイキ、今日はお客さんついてないの？」

「いやだなーもちろんサークさんのためですってば」

「そういう冗談は言わないこと。ホストの鉄則」

「そうなの？ 冗談ではないけど、それじゃこれからは言わないことにします」

「よろしくね。じゃあ、手の空いているホストさん。席に連れて行ってくださいるかしら？」

「了解です。お手をどうぞ、お客様」

サークさんがまた来てくれた。また来てくれたっていうんはなんか変やな。サークさんは俺がここで働きます前からの、この店の常連さんや。本人の口からはつきり聞いたことはないけど、サークさんは某大手企業の取締役なんやってー。すごいよなあ。見た感じ20代後半のおしとやかな感じのする上品さを持った女の人って感じやのに、実際はバリバリのキャリアウーマン。憧れるよなあ。そういう

かつこいい人って、男でも女でもマジ懂れる。俺もそんなかつこよさを持ちたいって思っとるけど、今は、“今”を無難に乗り切るだけで手一杯。

サクさんを奥のVIP席にお連れして、上座の椅子をひいて座ってもらおう。サクさんはワインとかやなくてファジーネーブルとか、そういったカクテル系がお好み。やけど1杯目は必ず梅酒。Dach Gartenじゃあ梅酒とかカクテルとかはかなり珍しい注文やねんけど、サクさんのために、極上の梅酒が常備されている。お客様に最高の時間を過ごしてもらうのが、この店の役割やしね。注文はなんも聞いてないねんけど、席についてすぐにサクさんの目の前には梅酒が運ばれてきた。店員みんな、サクさんの好みは知り尽くしてんねんよねー。つってもこれは、なにもサクさんに限ったことやなくて、常連のお客様やったら全員、好みを覚えてるんやけどさ。美味しそうに、味わうように、サクさんは梅酒を飲んでいく。それがまたすごい嬉しいそうな顔しててさ。俺、人の笑顔ってすごい好きなんよ。やからサクさんの笑顔に影響されて、俺も自然と笑顔になる。こういう雰囲気ってすごいと思うねん。笑顔って、バカにできへんよな。

と、そうやったそうやった。この間、サクさんに頼まれてたことの返事をせんと。グラスを口から離すタイミングを見計らって、俺はサクさんに話しかけた。

「あのさあサクさん」

「なあに？ あ、タイキもちゃんと飲み物頼んでね。最初の1杯はウーロン茶だっけ」

「へ？ よく知ってるねえ、サクさん。驚いた……。そう、俺の1杯目はウーロン茶だよ。いきなりアルコール類を飲むと、酔いがまわりやすいんだよね。だから」

「ふふふ、さすがのタイキもそこらは子供よねー。これからもホストしてくなら、ちゃんとアルコールに対して強くなるような修行をしなきゃだめなのよ？ アルコールも飲めないホストなんてすぐ

に埋もれていっちゃうんだから」

「うー、了解です」

ほんま、気にしてるんやけどなあ。俺がアルコールに実は弱かったみたいな衝撃の事実を知ったんは、このバイトをし始めてからなんよ。幸い毎日のようにアルコールを飲むことができる職場やから、修行の意味も込めて、オーナーとかマサキさんとかに励まされつつ飲まされる毎日。これでもちよつとずつ強くなってると思うねんけどなあ。うーん。やっぱりまだまだっすな。頑張ろう。

そんなことを考えてて、ふっと我に返ったときにはサクさんがちよこつと首を傾げながらこちらを見ていた。

「どうしたの？ タイキ。私に言いたいことあるんじゃないの？」

「あ！ そうなんです。こないだサクさんが言ってた拓斗のことなんですけど」

「ああ、断られたでしょ？」

「なんでわかるんですか？」

「あのね、私は結構前から、それこそタクトがここで働き始める前からこここの常連なのよ？ タクトがはじめてこの店にでた日だって覚えてるの。結構冷たい感じのする子だったけど、話題とか豊富でしょ？ タクトがここを辞めてしまうまでは、空いてる日は彼に相手をしてもらっていたの。つまり、タクトの性格なんてお見通し。この仕事をずっと続けたいとは思ってなかったみたいだしね」

「ほー……。サクさんってやっぱり人見てるよね。すごいなー」

「タイキ、すごいと思うなら自分もそうになれるように努力すんのよ？」

「努力させていただきまーす！」

この仕事の魅力。笑顔をたくさんみれるっちゅーこともあるねんけど、もう1つはこっちゃ。いろんな人がお客さんとしてきてくれるから、いろんな価値観とか、特技ってゆーのかな？とか、そういうんを見てこっちも影響されるわけ。こっちが想像もせんかったような考え方とか、たった数ヶ月でめっちゃいっぱい気付かされて、

すごいって思うことの連続。俺も将来、こんなサクさんみたいに誰かに影響を与えられるような考え方ができるようになりたいな。

サクさんはその後も数杯飲んで、その間にはこっちが驚くくらい、これからホストとしてやっていくための極意とか、ほんま笑っちゃうくらいいろいろしゃべってくれた。どっちかっていうと場を盛り上げていくんで俺らホストの役割やねんけど、サクさんて今日は妙に饒舌やったな。いや、こっちもすごい勉強させてもらっとるけどな。

サクさんが帰り支度をしはじめたから、俺もドアまでエスコートして送ってった。俺はサクさんが、恋愛とかそういうの関係なく好きやから、ちよっとだけ優先。

サクさんが帰った後、俺はちよっとだけ控え室で休んでた。いくらアルコールに弱いつたって、お客さんと一緒にいると、飲まんわけにはいかんから、それでサクさんに付き合って何杯か飲んでたわけ。サクさんは俺がアルコールに弱いのか知つつたから、他のホストに比べたらかなり大目にみてくれとったみたいやねんけど、それでも俺は酔ったみたいや。ほんと少し酔っただけって感じやっただから、ちよっと休んだだけですぐにフロアに戻った。

その瞬間。カラ……ン、と。背後でドアの開いた音がした。

俺はその音を聞いて振り向きつつ、入ってきたお客様に丁寧挨拶をする。そこにいたのはマサキさんの常連客であるキミカさんと、もう1人――。

俺は、キミカさんの後ろに心持ち隠れるように立っている女性から目が離せんかった。

「あ、タイキじゃん。やっほー。タイキにお出迎えしてもらえるなんてラッキーだねー」

「……」

「タイキ？　おいおい、戻ってこーい」

「！　ああ、すみませんキミカさん。ちよっと驚いただけだから」

「なにに驚いたんだよ。でもま、いつか。マサキさんは空いてる？」
「キミカさん連絡したでしょ？ さっきから控え室で待機してるよ」
「あは。よかったー。そうだ、この子ね、この店初めてなの。タイ
キが空いてるなら相手してあげて？」

「「え?!」」

「ほーら、加奈。隠れてないでこっちできて」

「加奈……さんと仰るんですか？」

「――瀬谷、加奈といいます。どうぞよろしく」

加奈さん、か。

当たり前や、別人に決まっとる。こんなところにいるわけがない
ねん。あの子は今頃、きっと京都で就寝中。それに、声もちよっと
低めやし。全く違う。別人や。そう自分に思い込ませる。思い込ま
せながら、ボーイの1人に合図をしてマサキさんと呼んでもらった。
そしてすぐに

人当たりがいいと自負する笑みを浮かべて、加奈さんという女性に
丁寧な挨拶をした。

――芽夢ちゃんと瓜二つの容姿をした、目の前でぎこちない笑み
を浮かべる女性に。

第6話

あれから、俺はなにをしましてんやろ。キミカさんと加奈さんが来てからの記憶がほとんどない。

あれから俺はなにを話した？ なにを聞いた？

どうやってエスコートして、どうやって場を盛り上げて、どうやって……。―― どうやって、俺は帰ってきたんやろか？

二日酔いでじわじわと痛みだす頭を抱えて、それでも一生懸命に考える。全く、一向に、全てを思い出す気配もみせん脳みそを俺はちよっと取り出して焼き潰してやろうかなと思った。やけど、まあそんなことをすれば俺自身生きていけなくなることは確実やから、諦めた。

じゃあ、いいよ。なにを話したとか、なにを聞いたとか、どうやってエスコートしたんかとか、どうやって場を盛り上げたんやとか、そういうん全部思い出さんでもええからさ。

―― この状況に陥ったんはなんでなんか、それだけ教えてくたさいよ。

You and I 06.

あーもー痛い痛い痛い……。アルコールに襲撃を受けた頭が割れるように痛かった。この痛みを抱えてこれ以上なにかを考えるんは正直無理そうやったから、俺はちよっと水分補給でもしようかなーってことで静かに静かにベッドを降した。静かにベッドに振動をかけんようにって心がけたつもりやねんけどそれでも微かに震えは起きちゃうもんやから、それが伝わってしもたんか、頭までを布団で

かわからへんし、なにしたらええんかもわからなかった。パニックになって慌てふためく俺をみやって、加奈さんてばにやにや笑ってるだけやねん。

くそっ、遊ばれてる気がする！

そんなことに気付いても動揺してる俺は口がうまく動かへん。おたおたしとる俺を見ていることに飽きたんか、加奈さんは現状について自分から話し始めた。

「大樹さあ。自分が昨日なにをしたか覚えてないの？」

「な、なにしたって、なにしたって、俺なにしたん?!」

「ふっふっふ……。そうなんだあ。なにも覚えてないんだあ」

「ちょ、だから俺なにしたっちゅーの!? 俺なんもしてへんよね、ね!?!」

「あーもーはいはいそうですよ。君はなんもしてないからそうやって泣かないの。あたしが悪人みたいじゃんか」

「(悪人やんか! 人のことからかって)」

「なんか言った？」

「ゆうとらへんし!」

あーもーほんま、マジ焦った! 俺は、相手が誰であれ初対面の女の人といきなりベッドに入るなんてことしたくないねん。嫌やねん! くすくすと笑う加奈さんは、ゆっくりとベッドに起き上がった。ああよかった。ちゃんと服着てるよ。シャツ1枚を羽織ってるだけとかやったらどうしようとか内心必死になって考えとったけど、ちゃんと着とった。まあ加奈さんの身体に俺の服がぶかぶかなんは仕方ないことやけど。

状況を把握するにしたがって俺は徐々に冷静さを取り戻し、それに伴って思考回路も回復してきた。さーて、とりあえずはこの状況を打開せんと話は進まへんねんや。驚いてたってはじまらへんから、大きく深呼吸を1つ。落ち着かんとな。

「よっしゃ。加奈さんとりあえずこっち来てや」

「ん? なに」

「なにつて、朝やねんで。気持ちええ……とまではいかんけど、朝起きたら朝ご飯食べんと。起き抜けてお腹すくやろ？ ま、そこまで大層なモン作られへんけど、勘弁してや。加奈さんは洋食派か和食派かどっち？」

「……」

「？ おーい、加奈さん？ 聞こえとる？」

「え、ああ、うん。私はパンが、いいな」

「了解しました。どっちにしろ時間はかかるやろから、先にシャワー浴びたりする？」

「……する」

大きめでふかふかのバスタオルと上下セットのジャージを用意して、バスルームに案内する。そこまで広いつてわけでもないけど、結構俺のお気に入り場所だったりする。

「ここやけど、使い方わかる？」

「うちのと似てるからわかるよ。ありがと。あ、あのさ、下着ある？」

「――下着はないけど勘弁してください」

「えー？ ホストなのにそんなのも準備していないわけ」「当たり前ですっ」

からかっていたのか、大笑いをしながら加奈さんがバスルームに入っていくを見届けて、俺はパンがいつてゆうてた加奈さんのためにキッチンへと向かった。とりあえずパンをトースターに放り込んで、冷蔵庫から卵とレタスとケチャップを取り出して、と。そうそう、ベーコンとキュウリもあるな。

いろんな人に不思議がられねんけど、俺は朝ご飯をきっちり食べるねんって思つとる。朝ご飯つてのはその日1日の原動力になるねんで？ すっげー大事やん。朝ご飯食べんかったら、講義中必ずといつていいほどお腹がボイコットするやろ。あれは結構恥ずかしいねんなあ。

加奈さんが濡れた髪をタオルで拭きつつキッチンへやってきた時

には、すでに簡素だけどカリカリのパンにスクランブルエッグとサラダをテーブルにセティングし終わって、俺は紅茶を入れていたとこやった。

「大樹ー。服とかありがと。助かったよ」

「加奈さんタイミングええなあ。紅茶はレモンかミルク、どっちがお好み？ ストレートってのもあるけど」

「砂糖大盛りでミルクがいい」

俺は加奈さんの好みに忠実に従い、髪を拭きつつかつ所在なさに立つとる加奈さんと呼んだ。もちろん椅子の1脚をひきながら。俺、小さい頃からレディーファースト仕込まれてるんよね。

「はい。加奈さんこっちへどうぞ」

「……大樹ってさ、基本紳士なのか、作ってるのか、どっちかわかんないんだけど」

「嫌なことゆうなー。こんな紳士な俺に対して、作ってる、とは失礼やで」

「あはははは！ 自分で紳士っていう？ フツー」

「……いわん？」

「いわないいわない」

おかしそうに笑う加奈さんは、それでも俺のひいた椅子に座ってくれた。俺も加奈さんの前の席に座る。1人で食事することに慣れとったから、こうやって誰かと一緒に食事するという行為は、すごくすぐったく思えた。

第6話（後書き）

めえみ様。感想に評価まで、本当にありがとうございます！

かなり嬉しい感想でしばらくの間はのた打ち回ってしまいました（笑。

これから精進していく所存ですので、よろしくお願いいたします。

第7話

「ね、大樹って結構甘えたりなの？」

気持ちのええ…….と思ひ込んだ朝。一人やなくて、久しぶりに誰かと一緒に摂る美味しい朝食（俺の手作りだけど）。そんなものに感動しつつ満足しつつ、ええ気分で食事をしとった俺は、その発言についつい機嫌を下降させるといった反応してしまった。冗談ってゆうんは、なにもこんな気分のええ時にするもんやないでしょ。

「冗談、なにゆうてんの加奈さん。そういう冗談を食事時にゆうんはやめて欲しいな。飯不味くならん？ なるでしょ。なるよね？ だからやめとこ」

「なーにそうムキになってんのよ。大体そう思わせる自分が悪いんじゃない」

「俺の、こういうところをみて、そんなふざけたこと思っとなるんですか？」

「目元が笑ってないわよ」

「どんなどころが！ そう思うんですか！」

「大樹もやっぱ子供だね……。そういうところが甘えたりだっていってるんだけど」

「いやこうゆうんで寧ろわがままの部類でしょ」

「相手の発言に一喜一憂するのは甘えたりというのよ」

脱力し、二の句が告げなくなる。なんやのなんやのなんやねん全く！ 俺のどこが甘えたりがちゅーの！？ 立派な成人男性に甘えたりとは全くもって失礼な！

You and I 07.

「おーいおーい大樹ーちよつと聞いているのー」

「……」

「それって無視してるのかほんとに聞こえないのかどっちー」

「……」

「……そういう仏頂面して食事摂ってて、楽しい？ 美味しい？」

「……誰がこういう顔にさせたんかわかる？」

「うふふ、あたしー☆」

ピキ、と脳内から不思議な音が聞こえた。でもまあ聞かんかったことにする。なにせ目の前にいる女性は、自己中心的でわがままで全人類は自分の足元にかしずくのよみたいな考えの持ち主で、えーとそれから……。

「スタイル抜群で、顔は綺麗で？」

「そーそー。足が綺麗で髪が綺麗で……ってちゃうわっ！ 加奈さんなに人の思考読んでんの！」

「いや大樹が口に出してたんだし」

「……」

屈辱やった。この俺が、あの拓斗にですら負けたことのない俺が、人に口で敵わんなんて！ あーもー！ さっきまでのええ気分はどこへやら、俺は瞬間的に相当不機嫌になった。つーか、なに？ 加奈さんはこんなどこにいてええのんか？ 彼氏はどーしたよ、彼氏さんはよ！ そんな綺麗やったら彼氏の一人や二人や三人や四人はいるでしょ？ いるよな？ 彼氏以外の男の部屋でのんびりしちゃってていいわけ？！ あかんやろ！

「ああ、あたし今は彼氏がいらないから安心して」

「だから人の思考読まんとってや！」

「いやだから大樹が口に出してるんだってば」

「うー……！！！」

ダメや、あかん。この分やったらきつと大学行ってもかっくんに迷惑かけることになるだけなんは目にみえとるし、大学サボったろうん、それがええわ、完璧。そうと決まれば早速かっくんにメール

せな。

俺は加奈さんをさらっと置き去りにして寝室に携帯を取りにいき、その場でかくんにメールを入れた。文面は……そうやなあ。『ただいま機嫌が絶好調に下降している為本日自主休講決定。後日ノートヨロシク!』。まあこんなもんでええやろ。かくくんならノートみせてくれへんのんは確実やけど、仕方あらへん。

不機嫌さを隠しめんとキッチンへ戻った。加奈さんは変わらずマイペースで食事をしとったんやけど、戻ってきた俺に気付いて自分の前の席を指す。つまりは俺の座ってた席や。癪やってんけど、一応食事を済ませよう、そう思って椅子に座りなおしてさっきの残りを食べ始めると、加奈さんはこっちをじっとみてきて。

「なに？」

声が不機嫌さをはらんでいるんはこの際どうしようもない。やけど、俺としてはこれでも自制しているほうやねん。中学時代、瞬間湯沸し器と呼ばれた俺がこの程度やねんからな。そんな俺の発言に加奈さんは少しだけその瞳を揺らす。反応の意図が掴めなくて、思わず俺も眉を顰めてしまった。

「……ごめんって。謝るから、その不機嫌さなんとかしてよ」

「なんとかしてよってゆわれてもなんともできへんのですけど」

「いやそこらへんはさ、やっぱ根性で」

「根性でなんともできへんし」

俺が反論したら、あろうことか加奈さんは小さく吹き出しました。何故でしょうか。一生懸命我慢してたみたいやねんけど耐え切れませんでしたってな感じで。なんやの、なんか笑うようなことあるん？

「あはは……! ああ、ごめんごめん」

「なんか嫌な感じやなー。加奈さんなんで笑っとるんよ」

「いやさ、大樹が関西弁使ってるんだもん。店での大樹と偉く違うから、そのギャップがすごいおかしい……」

「あ」

すっかり忘れとった。ここは俺の家。やけど、加奈さんの前。店

での俺は標準語、とまではいかんけど、まあ関西弁は封印しとるんやった。ついつい驚いたりここが家やったりしたせいか素でしゃべった。でもま、ええか。いきなり標準語に戻すこともないやろ。「俺のことば、そんなおかしい？」

「おかしい。すっごい。おかしい。も、ありえないくらい、ね」

そういつて俯いた加奈さんの、俯く直前の表情をみて、俺はちょっと動揺してしまった。その顔がすごく、悲しそうな、切なそうな、そんな感じにみえたから――。

「ここが加奈さんの家、スカ」

「そ、驚きつつーかびっくりでしょ？ パニックでしょ？ 叫んでもいーよ」

「いやさすがにそこまではしたくないつつか別にパニックにもならないつつか……。でもほんま偶然やんね。まさか、マンションが隣同士やなんて」

そう。あの後なんとか気を取り戻した俺は、当たり障りの無い話題なんかを提供しつつ加奈さんの浮上に手を貸したわけ。それでどーせ大学サボって時間があるんやったらってなことで加奈さんと遊びに行くことにして（いやどっちかってえと俺がいいだしたわけやなくて、加奈さんに無理矢理約束させられたってゆうた方が正しい気がしなくもないけど）、とりあえずは加奈さんを家に送ることにしたわけで。

んで、その加奈さんの家ってのが、こともあろうに俺の住むマンションのすぐ隣、やったわけ。

「んー、大樹に服借りたっていつても、男物だしぶかぶかだし。一応着替えようと思うのね。化粧もしたいから結構時間かかるかもし

れないわけ。というわけで、うちで時間潰してくれる？」

「そりゃ、ま、いいけど……」

「よしきーまり♪ ほら、さっさと来て！」

完全オートロックのエントランスを抜け、加奈さんは慣れた様子でエレベーターのボタンを押す。えっと、加奈さんは自分の住むところやから慣れてても不思議はないっちゅーかそれが当たり前やねんけど、俺はこのマンションに入るんは初めてで。なんだか格調高いこのマンションーマンションってゆうより億ションやなこれは――に圧倒されとった。なんや上京したての田舎者みたいにキョロキョロしたり、触って指紋付いたらやばいとかなんか悪いことしたわけでもないのに思ったりなんかして、それはそれはかなりの挙動不審やったみたいや。

んで、現在加奈さんの自室前にいるわけなんです。が。

「ねー加奈さん」

「なーにー？」

「一生懸命靴の中にあるはずの鍵を探しているところ大変恐縮なのですが、この階、他に住んどる人は？」

「あるわけないじゃん。この階全部あたしのよ？」

「やっぱり！」

この階は、億ション最上階である17階。このフロア全体を、加奈さんが所有してるんやって。

あーもーなにがなんだか……。

第8話

「だからあなたは何者で……て、ちょっと、聞いてますか？ 加奈さん」

「聞いてないよー聞いてないのー。あ、ほらほらお酒なくなっちゃったよ新しいの持ってきて注いで」

「ああちよつと待ってください今……じゃなくって！ 話逸らさないでください！」

「いやねーもー話なんて逸らしてないわよ？ てゆーかあたしお客よ？ 接客するのが仕事じゃないの？」

「……あんたたち、いつのまにか仲良くなったわねえ」

「そうなのー。大樹ったらね？ あたしのことが好きで好きで仕方がないって」

「言ってますんよ！」

「なんかいいコンビだな」

「マサキさんまでなに言ってるんですか！」

「「「本当のことじゃん」」」

「どこが？ ねえ、なにが本当なんですか！」

本気で泣きかけながら叫び始めている大樹をみて、同じテーブルに座っていた3人（加奈、キミカ、マサキの3人）はとてつもなく面白いものをみたと幸せを感じていた。いじられキャラ、という肩書きを、大樹が今後ずっと頂くようになるきっかけである。

——かわいそうに。

You and I 08.

「はいはいわかったわかったあたしが悪かったからそっちでいじけ

てないでほら泣かないの」

「うゝ……」

「あーもーやっぱり甘えたがりだねえ」

「甘えたがりじゃないです！」

確かに自分でも、ちょっとだけわがまままんちゃうかなっていか甘えてる？みたいな感じするようないようなってかぶっちゃけるんやけどそれでも加奈さんにゆわれるんはなんか嫌やねんよないや別に人によってどうこうか思っとるわけやなくて俺がこんな風になつとるんは加奈さんの所為っていうかまあとりあえずは加奈さんの所為であるわけやしそんなことゆわれる筋合いはないんじゃないのかな？みたいな。いやいや、とりあえず何年もあとになつてからやつと当時の流行に追いついた女子高生みたいな言い方は止めんか俺っていうか論点すでにずれとるから戻せ俺。

一息、二息、三息ってなんか言葉おかしいんやけど、とりあえず大きく深呼吸吸して息を整える。改めて加奈さんにたいして言及しようとして顔を上げると、俺以外の3人は、俺のことを興味津々って感じ丸出しの顔でみとるから、ちょっとひいた。

「なに人のことじろじろ見てんですかしかも3人揃って」

「いやだって、なんだかタイキ可愛いんだもん」

「そうだよなー。お前ほんとに20歳？ 絶対精神年齢1ケタだろ」

「つーかやっぱり大樹って甘えたがり？ っていうか母性本能くすぐるわよね」

「……自分ら好き勝手にいいすぎ……」

三者三様の言葉で人のこと好き放題けなしてくれちゃって、そのことに俺はひどく傷つき、項垂れた。正確にゆうと、3人に背を向けていじけに走ったわけや。いまの俺の周囲には黒い陰が容赦なく発生しとって、それは自分でもわかるくらい。接客としては最低の態度なんやろうけど、やけど俺やって傷つくことくらいあんねんでふん。

あん時やってさ、ほんま驚いたねん。加奈さんの自室に（半ば強

制的に）あげてもらって、中にさりげなく配置してある調度類の豪華さに驚きすぎて口も利けないぜってゆう期間が過ぎてから、とりあえず加奈さんの素性について爽やかにさりとてわざとらしくなく尋ねてみると、さすがは加奈さん。するりするりとすり抜けてかつ“そんなにあたしのことが知りたいの？ それはずばり、恋？”とかゆわれちゃってなんちゅうか売り言葉に買い言葉で、今に至るわけや。あんなにこの話題で俺のこと引っ掻き回してくれちゃったくせに、いまだに自分の素性を教えてくれへんのか。こうなってもたらもうヤケになるってーのが人間ってもんでしよう！

んで、ヤケにのって飲みすぎたらしく、なんやテンションの浮き沈みが激しかったりするねんな。

「あーもーよしよし、大樹クンは泣き虫ですなー」

「……そういう発言が俺を余計に傷つけるってわかってやっています？」

「も・ち・ろ・ん☆」

「……」

「はいはいタイキ、とりあえずなんか食うか？ それとも飲むか？」

「わたしたちの奢りだから気にしないで」

「餌付け？ それってそのものずばりで餌付けってことですか？！」

「当たり前じゃん、ねえマサキさん」

「そうそう。当たり前。これ以上楽しいことなんてないくらいにな」

「……うー……」

「やっぱ大樹っていいじりやすいよね」

「！！！！」

京都にいた頃は俺、めっちゃツツコミ役やってん。日に10回はツツコミをいれんと落ち着かんほど、ツツコミ狂とゆわれたのに俺。それなのに、それなのに。

ん？ ってかちよお待ち。いきなりやねんけど、俺、なんでこの3人とこんな和やかに話してるんやろ。ちゅーか、キミカさんとはと

もかく加奈さんとは最近出会ったばかりで、しかも芽夢ちゃんに微妙に似てて（ほんまは、目元とか似てるねんけど全体的にはあんま似とらん。初めて会ったときのアレは、驚きすぎた俺の脳がみせた幻覚やったみたい）、緊張してもてそうそう話なんてできへんな、とか思ってたんだけど、何故？

「それはねー、あの時も大樹は飲みすぎてテンションあがりっぱなしになって、あたしも飲みすぎてテンションあがっちゃって、すっかり意気投合しちゃったからなの」

「そうなのか……」

もう俺の思考を読まれたからといって驚かない程度には“加奈さん”という存在を知っとる。やけど、いくら意気投合したからって、俺、初対面の相手をいきなり自分の家にあげるかなあ。しかも相手は女の人やで、お客様や。いくらなんでもこれはおかしいんちゃうかな。

「それは大樹が誘ったんじゃないくて、あたしが大樹の家に押しかけたの。んで酔いすぎて警戒心も限りなく薄かった大樹を騙して泊めてもらったのー」

「いや加奈さんそれ犯罪だから！」

「ふふふー、あたしが“無理矢理”っていったら警察はどっちを捕まえると思う？」

「全部計算してやったの？ マジかよ、加奈さん腹黒すぎ！」

「やだなあそれもこれもみんな大樹のためを思って」

「思っていないし！」

くそう、加奈さんを論破できない。口で勝てない。さすが年上とこういうことだけあって人生経験が違いすぎるんやろうか。キミカさんとマサキさんはこっちのことなんてどうでもええって風に和やかに談笑しとるし、俺はこんなところでなにしてんねやろとかついっと思ってしまう。だって、このバイトを始めんかったらとりあえずこの3人とは出会わなかったわけやし、それはちょっと寂しいけど、それでもこうやって3人から集中攻撃を受けることもなかったわけ

や。そういう“もしも”だったら”みたいな考えが頭の中をぐるぐるぐるぐるぐる。ドラえもんの四次元ポケットを奪い取って、「もしもボックス」を使いたい。空想上のロボットだけど。

「違うわ、大樹。ドラえもんは実在するに決まってるじゃない!」

「は!?! 加奈さんそれ本気でゆってる? 熱は? 頭おかしくなった? びよ、病院行こう病院! 内科かな、外科かな。あ、脳神経外科か!」

「うるさい大樹、大人しくあたしの話を聞きなさい! あのね、ドラえもんは未来の世界のネコ型ロボットなのよ? つまり、未来に行けばいるってことよ!」

「つーか根本的な問題として、まず未来なんかに行けんし!」

「だからそこらへんも根性で」

「根性なんかでどうこうなるもんでもないでしょっ!」

そうやって、自分で自分に店内での禁止命令を出しとった関西弁を微妙に使つとることもわからんくらい激しい口論を交わすうちに、俺の頭ん中にはだんだんと靄がかかってきとって。

あ、なんかまずいかも、と思ったときにはすでに俺の意識はフェードアウトしてた。

第9話

額に冷たいなにかが置かれる感覚がして、それで俺は意識が戻った。しばらくは体を動かすことができなくて、そのまま身体を休めるに留める。うーん……前にもこんなことあったなあ。俺、今どこにってるんやろ。――また加奈さんを家に連れ込むとかしてへんよな。

「おーいタイキー。目え覚めたか？」

俺を呼ぶ、そんな声がした気がして目を開けてみようと思った。ほんまゆっくり開けていつてんやけど、暗闇に慣れたとでもいうんか、ずっと閉じとった目をいきなり開けると、部屋の明かりが目をさしてまぶしいことには変わらない。何度かまばたきをしてみても目を明かりに慣らす。

「あー……あれえ？　なにやってんのマサキさんじゃないっすかー。ここ俺んちじゃないよね、どこっすか」

「酔ってる上にやーっぱなんも覚えてないんだなお前。飲みすぎてぶっ倒れたんだよ、また。いい加減アルコールに強くなれっての」

そういつてマサキさんは、俺の頭をパチッと叩いた。かるーくやってんけど、それでもその衝撃が身体中を駆け回る。鐘が鳴るなんてもんじゃすまされん痛みやった。痛みに叫びだすわけにもいかず、俺は静かに呻くことしかできなかった。

確か、マサキさんとか加奈さんとかキミカさんとかと一緒にの席について、加奈さんと口論はヒートアップ。果ては飲みすぎてしもたってわけか。だから頭ん中が痛いんや、へー。そう自覚したら余計に頭が痛くなってきやがった。

マサキさんにゆわれるまでもなく、ほんまに俺やってもっとアルコールに強くなりたさい。一応こんな商売やしな。こんな商売っても別に嫌悪感とか罪悪感とかあるわけやないけど、最近では寧ろ誇りを持って接客しとるねんけど、職業柄ネックになるんでこの“アルコールに弱い”こと。体質的に考えてみればどうしようもないんやろうけど、ちよつとまずいねん。って前も愚痴ったような気がするけど……。まあ、ことこれに関してゆえば、習うより慣れろ、という言葉しか当てはまらんわけで。

そんなことはともかく、また接客の最中に寝やがったんかよ俺！
んで、ここでNo.1のマサキさんに手当てをしてもらっていた、と。なんか孫の代まで笑い話になりそうなことやっとな。いい加減、自分の限度ってもんを考えなきゃいかんやろ自分。全く、仮にもホストやのに。あろうことかお客様にまで迷惑かけてどないするよ。きちんと謝罪せな。マサキさんにもやし、加奈さんとキミカさんにも。

「あ、そーいえば加奈さんとキミカさんは残ってますか？　ってかその前にいま何時なのかわかります？」

「いまはもう5時前だぞ。閉店時間はとくに過ぎてるから。あの2人も帰ったよ。相変わらずアルコールに弱いのねーとかって笑いながらな。お前さ、質問はいいから起きてくれよ。俺、帰りたいんだだけ」

そうゆわれてはじめて周りを見渡す。確かにしーんとしとって、マサキさん以外の人をみつけることはかなわなかった。ここはロッカールームやねんけど、開店中はローテーションで1人ずつ休憩に入るから、ここに誰もいないなんちゅーことはまずありえない。と、いうことはやっぱもう閉店しとるんや。駄目やん自分。つーことはあれやわ。なんでマサキさんがここにいるんかつちゅーと、それはもちろん俺が起きるんを待っててくれた、と。なんで俺を待っててくれたつちゅーと、それはもちろん――。

「いい加減に店閉めさせろや」

「うわっ、ご、ごめんなさいっ」

右手の人差し指にこの店の鍵を引っ掛けて、くるくる回しつつ俺を脅すマサキさん。まあこの人の場合、全ての行動自体が子供っぽいやねん。早く帰らんと明日（日付では今日になるのかな？）の仕事に影響でるんやろ。これ以上マサキさんに迷惑かけるわけにはいかんってことで、俺は出来る限りすばやく行動を起こした。

とりあえず顔を洗って頭をできるだけはつきりさせる。2人で揃って店を出る頃には、俺が起きてからさらに20分ほど経過しとったんやけど、そのことについては全く文句をゆわれなかった。時間にルーズとみせかけてほんまはかなり時間にうるさいマサキさんが、時間に関して文句をゆわへんなんておかしい。おかしすぎる。

ちらり、と隣を歩くマサキさんを横目でみてみたら、怒ってるとかそんな感じは全然せんくて、寧ろ無表情な感じ。いつやってころ変わる表情がウリのマサキさんが、どうしたんやろ。こんなマサキさんはみたことないし、対処の方法がわからへん。わからへんから、この際そのままでおることにした。きつと、なにかあったらマサキさんからゆってきてくれるはずやし。案の定、しばらく無言で歩いて、もうすぐタクシー乗り場に到着しますっちゅーときにマサキさんは口を開いた。それもためらいがちに。

「あの、さあ。タイキ」

「はい。なんですか？」

「昨日の電話なんだけど、マジでシフトの変更頼んじやっていい？」
「ああ、18日ですよ。全然構わないですよー。大学も休みだし、特になんか予定が入ってるわけでもないし。とりあえずは今日のお礼ってことで。ってかマサキさんどっか行くんですか？ あれから思い出したんだけど、マサキさんって毎月18日は休んでますよね」
「あー、まあ。18日は弟の月命日なんだよ。それで」

「弟さん？」

「そ。あの馬鹿なにを血迷ったか無免でバイク乗り回してたみたいでな。速度違反した上にトラックと正面衝突して実の兄よりも先に死んじゃったわけ。他に家族もないことだし、月命日くらい墓参りしてやらないと寂しがるんじゃないかなーかなーと思ってさ。いきがってたわりにはかなり甘ったれなところがあつたからな、あいつ」

「そうなんですか。すみません思い出させちゃって」

「そんな欠片も思っていないこというなよータイキ」

そんなー、とマサキさんは明るく手を振ってタクシーに乗り込んでいった。俺はタクシー乗り場に1人取り残されたわけやねんけど、なんだか家に直帰する気分でもなくてタクシー乗り場に設置されとったベンチに腰を下ろしてみた。

なんだかなあ。改めて、この世の中にはいろんな人いるんやなーって思い知らされる。いつも笑っていたからって、無表情やからって、誰だってなにかしらの傷を負って生きとることには変わりがなくて。

ずっと昔の自分を思い出してみる。あの頃は自分ほど不幸な人間はおらんって思ってたけど、不幸とかそんなもんは他の人と比べるべきもんなんかやないし、なんかの競争みたいに誰が一番であるとか考えるもんでもない。

誰だっているんなもんを抱えとって、それを捨てては生きていけへんのかもしれんなあ。

しばらくベンチにそのまま座りこんで、頭と身体が冷えた頃に立ち上がる。このまま外におって風邪ひいたりしたらシャレにならんし、さっさと帰って一休みしよ。都合がええことに明日はなんも講義はないから、大学のことはキレイさっぱり忘れてしまお。

熱い湯をバスタブいっぱい張って、ゆっくり身体を温めて、ちやーんと明日に備えんとな。

そうや。明日加奈さんと連絡とって、今日の失態を謝ることも忘れんとせなあかな。キミカさんの連絡先なんて知らんから、加奈

さん経由でキミカさんにも謝らんなあ。連絡とれなくてもまた店であつたときに……というか、すぐ横のマンションやねんし、加奈さんの暇そうな時間を見計らって直接謝りに行けばええか。うーん、それもおかしいかな、一応店員とお客様やし。うーん。。

ま、それも明日の話や。今日はもう寝よ。

計ってたんかと思えるほどぴったり完璧なタイミングでタクシーが一台走ってきた。やからタクシーを捕まえて、俺は帰宅の途にいた。

第10話

問題の18日、俺は無事にマサキさんとのシフト交代もすませ（別にええってゆうたのにさ、あの人俺のシフト分を1回肩代わりするってゆうて聞かんかってん）（いい年しとるくせに子供みたいな人やなあ）、加奈さんとキミカさんにも非礼を謝って、無事に一息つくことができた。

あれから結構、お店ではこの4人で固まることが多くなって。加奈さんとはマンションが近いってこともあって2人で遊びに行ったりする機会も増えたねん（基本は無理矢理やねんけど）。お互いの家にご飯を食べに行ったりな。もっともこれは、主に加奈さんが俺の家に來るってか押し入るって感じやねんけど、加奈さんの彼氏に失礼やな。失礼やんな。聞いたことないねんけど。

つかさ、あの人のテンションめっちゃ馴染むんよね。こう、自分とフィーリングが合うって感じでな。そんで向こうも俺を男としてじゃなくて、弟としてみとるし絶対。いつまでたっても加奈さんは俺のこといじり倒すし。まあ最近では俺も反撃し始めたからどっこいどっこいや。

でも、そういうことをサクさんをはじめいろんなお客さまから苦笑交じりにずるいってゆわれだしてんよね。仮にも店のNo.1とNo.2やから。加奈さんとキミカさんで独占すんなーって。嬉しいんやけど、そればっかやなくて。確かにそうやんなー。俺らはお客様をおもてなしするんが仕事。特定の人ばかり贔屓、しとるわけやないねんけど、今のまんまやったらあかんねん。これからはもうちょっと他のお客様のこと考えんな。

そんな中、加奈さんが店に来てくれなくなったんは、はたして偶然か否か。

加奈さんと連絡が取れなくなって、というかほぼ連日のようにキミカさんと連れ立って店に来てくれとった加奈さんの顔をみんくなくて早1週間。俺はいままでの自分の行いを反芻してみた。別に怒らせるような言動をしたわけでもないねんし、来るなといったわけでもないわけや。最近では俺やマサキさんも4人で固まることを意識的に少なめにしとったわけで、他のお客さまからの文句だって減っとして。もちろんまだまだ話の流れでかるーく文句をゆうてくるお客様はおるんやけど、そのお客様たちの鼻屑は俺やない。かといってマサキさんでもないんやから、そこまで重要視する必要なんてないわけや。やからそれが、加奈さんが店に来なくなることと関係してるとは思えへん。まあそんなことを気にするような神経細やかな女の人やとは、俺もマサキさんも思っとらんねんけどな。お客様やし、いろいろ個人的な都合はあるよなーとそう気にせんようにつとめとった。

それでもやっぱり心配になりだしたんが、キミカさんが1人で来てくれたときやってん。この時は、俺もマサキさんもちょうどついたとお客様が帰ったあとで暇しとって、久しぶりに3人で席に着いたわけやねんけど、俺やマサキさん、加えて他のホストまでが気にしていたってこともあって、話は加奈さんのことへと流れていった。

「あー、やっぱりここにも来てないんだねー加奈は」

「ここにも？　ってどーゆうことですかキミカさん」

「あ、いやいまさー加奈大学にも来てなくて、ちよっとみんなで心配し始めてんのね。あの子が連絡もなく休むとか初めてだからさ。皆勤賞ペースで来てたのに驚きでしょ？」

「いやいやそんなことよりもまず加奈さんやキミカさんが大学生だ

ったってことが初耳だしそこらへんに驚きですよっ」

「そう？ まあそんなことはともかく、心配だよねー」

「確かに。あのカナさんから連絡ないなんてなあ。体調崩してんじやないの？」

「そういやそうよねー。病氣してたら連絡しにくい……ってわけでもないけど、相変わらずマサキさんいいこと言うね。そこらへんあたしら全く考えてなかったよあはは。えっと、店の中で携帯使っても支障ないかな？ ここ」

「全然オッケー」

そんな会話がマサキさんとキミカさんの間であって、善は急げとばかりにキミカさんが携帯を掴む。躊躇わずにボタンを何度か押して、携帯を耳に押し付けた。すぐ側にいる人が携帯使ってるのにうるさくするわけにはいから、俺もマサキさんも黙って飲み物を飲んだりしてキミカさんの行動を見届ける。時間がたつにつれてキミカさんのウルワシイ眉間にはしわが刻まれてった。

いい加減、いまの加奈さんは着信に出ることができへのやるなあって3人が3人とも考えた矢先にキミカさんの表情が変わった。すぐに会話が始まる。

「加奈？ よかった。なんかあったのかと、ちょ、あんたなにして……うん」

「うん、ゆっくりでいいから、話しなさい」

「……そう。わかった」

「タイキに……から、あたしの鍵貸していい？」

「は？」

ぼんやりしている俺の耳に飛び込んできた、会話中に出た俺の名前。一体この人らはなにを話してんの？ いや、別にここは店の中やねんから話の流れで俺の名前やマサキさんの名前がでてきたっておかしくはない。おかしくはない、ねんけど。やっぱりなんかおかしい。

なんか気になって、耳を済ませる。その時にはもう会話が終盤に

差し掛かっとなったようで、突然の電話に対する謝罪とまた連絡する
ちゅー言葉を発してキミカさんは電話を切った。

「なんかね、やっぱりマサキさんのいうとおり、加奈風邪ひいてた
よ。声が鼻声だし喋るのもだるそうだった。熱もあるっていった
し、悪いことしたな」

「それはそうと、その風邪結構長引いてるんじゃないか？ 連絡な
くなってしばらくたつんだろ？」

「そうなの。一向に熱が下がらないし身体はだるいしで動く気力も
ないっていつてるの。そんなわけでタイキ、加奈をよろしくね」

「は？ いや話の流れがわかりません」

「もー鈍いんだから！ 加奈の看病しに行けっつってんの！」

そう叫んでキミカさんが俺の目の前に突きつけてきたんは1つの
鍵。反射的に受け取ってしまったんやけど、これはまさか、まさか
ね。恐る恐る手の平にある鍵とキミカさんの顔とを見比べる。その
度にキミカさんの顔はどんどん意地の悪い笑みを浮かべていくみた
いでちよっと背筋が寒くなった。固まってしもた自分の手を握り締
め、何度目かに目が合った瞬間、キミカさんはほんまに10人いれ
ば10人振り向くくらい素敵な笑みを浮かべた。こんなときに
限って嫌な予感ちゅーのは的中する。

「じゃ、タイキ。加奈をよろしく」

「ちよちよちよちよと待ってくださいよ！ なんで俺がつっか
別に俺は構わないですけど、俺が行くよりもキミカさんが行ったほ
うが絶対加奈さんは安心するでしょ！ 女同士なんだし！」

「性別がどうじゃなくて、あたしが行くよりあんたのほうが適
任だから行けっつってんの！ 大体あたしが行ってもなにもできな
いわよ！」

「あるじゃないすか！ おかゆ作ったり額冷やしたり！」

「あたし家事能力皆無だもーん」

「こらっ」

「そういうわけらしいしから、タイキ、お前行ってこい。カナさん

看病して復活させてもう一度この店にお連れしろ」

「ま、マサキさんまでなに言ってるの?! 嫁入り前の女性の看病とか男がしちゃいけないでしょ!」

「行つてこい」

「……」

いっくら反論しても聞き入れてくれなくて、果てはマサキさん、俺の意向を無視してオーナーにまで早退するちゅー話を取り付けてしまいがった。オーナーもお得意さんのためならばって簡単に許可出してまうし、こうなってしまったらもう取り返しはつかん。

俺はわざとらしく大きなため息をついた。そんな抗議方法やったら唯我独尊を地で行くこの2人には通じへんみたいで、満面の笑みで手まで振られた。頑張つてこいって、なにを頑張れちゅーねん。いや、こうなってしまった以上、誠心誠意看病させてもらうけどさ。

俺は、看病に必要そうなものを頭の中で考えながら店をでた。

第11話

「卵買ったー、お酒も買ったー、スポーツドリンクも買ったー。え……と、ああそうそう。肝心なもん忘れとった」

俺は24時間営業のスーパーの袋を片手に、ドラッグストアへと向かう。

You and I 11.

ほんま昨今は便利になったよなあ。と、俺はドラッグストアへの道をぽくぽくと歩きながらしみじみ思った。いや、だってさ、数年前まではコンビニやってこんな風に全国津々浦々に存在しなかったわけやし、24時間営業のスーパーだって？ なんじゃそりゃそんな便利な店あんのかい！ 的な感じやったやん？ それ考えるとさーほんま便利な世の中になったもんやと思うわけ。まあね、便利なほうがええとゆうてしまえばそれまでやねんけど。こんな場合にほんま助かるけどさ。

そんなことをごちゃごちゃ考えながらドラッグストアの中に入っていく。1つ1つの棚を覗いていって、3回目で医薬品関係の棚にたどり着いた。上の段から下に向かって、右から左、1段下がって次は左から右、ちゅー感じで視線を流す。そうしとると、3段目の真ん中くらいにお目当ての風邪薬とヒエピタを発見した。

「よしよし。これこれ」

ふんふん♪と鼻歌を歌いながら、レジで会計をすませた。会計の女の子たちが俺のことをちょっと胡散臭げな目でみとったんはきつと気のせいや。うん、気のせい。そんなちっちゃいことにとらわれとったらあかで大樹！ いくら今の俺が黒のスーツ姿で髪を流れ

るままに撫で付けとってぱっと見ホストと丸わかりでも、そんなことは断じてないさ！

そう思い込んでさっさとそのドラッグストアを後にした。数メートルほど離れてから、俺はちらっとその店を振り返る。その店はほんま全国チェーンの有名なドラッグストアで、でも対応が悪すぎ。それはこの店限定か？ それとも全店そうなんか？ つーか寧ろ俺限定？ これはみんなにゆってやらんと。俺やって人間なんやねんから。

加奈さんの家に行く前に、俺は服を着替えることにして一度家に戻った。スーツ姿で満足に看病できるかって考えてみると、そんなもんでできるかっちゅうわけでして。そんなわけで今の俺の姿はすっげラフ。ジーパンにシャツってなオシヤレ心もなんもない格好で、俺はスーツから解放されてちよっとだけ嬉しかったりする。着替えるのに若干時間かかってんけど、とりあえずは順調に加奈さんの家に到着する。あーあ。改めてみんでも、ここは豪華すぎる。はじめの頃は豪華さに圧倒されて緊張しとってんけど、最近ではなんとか慣れて普通に行き来できたりする。つーかな、一応俺もこういう豪華な気いしてきた。こうゆうところに住みたいとは思わんけど、正直憧れはあるな。

キミカさんから預かった合鍵で、おどおどしながらもエントランスを抜ける。エレベーターで17階まであがってから、すぐ目の前にある玄関のチャイムを1度押してみた。ピンポーンと案外普通の音が聞こえてきた……だけやった。中からの反応ちゅーもんがない。そりゃ加奈さんは風邪ひいとるねんから、寝とるよな。こんな時のためにキミカさんに鍵を押し付けられたんやろうけど、やっぱ女の人の家に勝手に入るわけにはいかん。家ん中にいるとわかつとってもしれって失礼な気がする。ダルイやろけどごめんなと呟いてから、俺は自分の携帯から加奈さんの携帯に電話をかけた。

「……はあい、こちら、瀬谷……」

「あ、加奈さん？ 体調悪いのにごめん。大樹です。あのさ、キミカさんから連絡いってると思うねんけど、俺今加奈さんの家の前にいるのね。合鍵も借りとる。勝手に開けて入ってええかな？」

「ど、ぞ」

「ほんまごめんな。お邪魔します」

すぐに電話を切った。やばい、どの程度体調悪いんか先に聞いとったらよかった。あの声の調子だとかかなりやばい予感がする。あの声のかすれ具合、携帯越しに感じるだるさ具合。あああやばい！！

一礼してすぐに鍵穴に鍵を差し込む。さすが高級マンションってなもんで、鍵の形状はかなり特殊。初めてみる形状やねんこれ。慣れてないそれをがちやがちゃといじりまわし、なんとか鍵を開けることに成功した。ほっと一息ついて、すぐに加奈さんの家にあがりこむ。もちろん挨拶なんかも忘れずに。

「もしもーし、加奈さーん。俺です、大樹。お邪魔しますねー」

あの電話の状態からして加奈さんは相当風邪に参ってるとお見受けした。……お聞き受けした？ まあつまり、そんなダルイ状態にいる場所はどこ？ ちゅー話になるねんけど、そんなんわかりきつとるよな。俺は少しばかり覚えてるこの家の間取りを考えて寝室へと向かう。廊下を数メートルほど歩いた先に辿りついたドアをノックして静かに開けると、加奈さんはやっぱベッド上でうずくまっていた。

「加奈さん、大丈夫？」

声をかけながら、加奈さんへと近づいていく。うわー、加奈さん頬が上気しとるし、息づかいも荒い。俺の声かけに反応してか、加奈さんは目を開けたんやけど、その目やって焦点あつとらんでやばい。頷こうとしたところをぎりぎりで止めた。こんな状態やつたら喋るんやって動くんやって辛いやろ。そのまま休んどって、と前置きしてから俺は加奈さんの額に手を当てた。うっわー、やっぱ熱いわ。40℃はないと思うんやけど、それでも高温。本人曰く「普段

低体温なのー」だそうやから、そりゃしんどいって。こんな状態でずっと1人我慢してたん？ 誰かを呼べばよかったのにといいながら、俺は左手に下げとった袋からあの対応の悪いドラッグストアで買ってきたヒエピタを取り出して慎重に加奈さんの額へ貼った。少し気持ちが悪かったんか、加奈さんの顔に微かな笑みが浮かんだ。それをみて俺は残りのヒエピタ4枚をベッド横に設置してあるサイドテーブルに並べて、それからもう一回加奈さんに問いかけた。

「ねー加奈さん。加奈さんの手え握るから返事が“うん”やったらちょっと握り返して。“いいえ”やったらなんもせんでええから。いい？」

早速、微かな力で握り返された。“うん”の、合図やった。

「加奈さんな、この状態しばらく続いてたみたいやし、ほとんど飲み食いしとらんでしょ？ やから、今からキッチン借りておかゆ作ろうと思っとるんよ。なんか喉通りそう？ 食べさせたるし、動けんでも大丈夫やと思うんやけど」

もう一回握り返された。

「そっか、よかった。加奈さん卵アレルギーとかなかったよな？ 風邪の時は卵がゆでしよっちゅーことで卵買ってきたんやけど、おかゆに入れても大丈夫？」

さらにもう一回。これで、終了。

「おっけ。じゃあまずは飲み物を持ってくるわ。ちょっと待って」

軽く背中をさすって、乱れとった布団を加奈さんの身体に巻きつけて、寝室をでた。キッチンに行って、まずは冷凍庫から氷を数個取り出しこれまた食器棚から取り出したグラスへと放り込む。そこへ、ヒエピタがなくなったおかげで少しだけ軽くなった袋からスポーツドリンクを取り出して注いだ。何度かカラカラとまわしてからストローと一緒に運んで、静かに寝室のドアを開ける。と。

「あーらら……加奈さんってば早すぎるやろ……」

ベッドに丸まっている加奈さんは、すでに安らかなる眠りの世界

へと旅立っとなった。息づかいは荒いけどリズム一定で落ち着い
たし、なんかすごい安らかな表情ってゆえばええんかな。さつき
は大違いの表情。俺、という人がいるってことで安心したんかな
？ 加奈さん、へんなところで我慢するねんから。もうちょっと人に
頼ってもええと思うんやけどな。

グラスはサイドテーブルへ置いて、きびすを返す。静かに寝
室を出てキッチンへと向かった。加奈さんがゆっくり寝れてるうち
に、甘めの卵がゆを作らんといかん、と思いつながら。

第12話

「加奈さんさー、ぶっちゃけ俺のこと男としてみてないっしょ？」

「当たり前じゃんそんなの。なにいまさら気付いてんの？」

「……やっぱり」

いや、別にショックとかやないねんで。きっとできの悪い弟系列な感じにみられてんねんなーくらいわかつたで。でもさ。いくらなんでもあれは男として結構凹むねんて。男としてみやがれこのやろーとは思わんねんけど、うーん。

どうしたもんかね。一応、俺ホストなんよ？

You and I 12.

加奈さんの風邪はぎりぎりで肺炎にまでは進行しとらんくって入院するまでには至らんと、しばらく自宅での療養でなんとなるってことやった。最初は身体を起き上がらせることもままならんかってんけど、病院で貰った薬を飲んだり栄養満点のご飯食べたりするうちに体調が戻ってきよって、それにしたがって加奈さんの調子も戻ってきて。俺らにとっては結構安心したっちゅーかなんちゅーか。とりあえずはよかったよかっためでたしめでたし、と一安心や。そんでもまだまだ油断は禁物。いつぶり返すかわからんから外出は厳禁ってことで、一番家が近い（そりゃそーだ。マンション隣同士やもんね）俺が代表して食料品の買出しとか食事作ったりってのを担当してる。もちろん加奈さんの（自称）親友であるキミカさんはその他社交関係が担当。大学での講義のノートを届けたりとか、加奈さんを心配する知り合いとかに状況説明をしたりするんが役目。さすがに俺やったらそんなことできへんしな。大学もちゃうことです

し？

そんなこんなで症状がそれ以上悪化することもなく、そろそろ普段どおりの加奈さんに戻ってきたなーって感じがする。今やってさ、こうして俺が大事をとって休んだら加奈さんどこに食事を作りに来ているっちゅーのに、加奈さんは「大樹はきつと主夫に向いてるよね」とかって人のことからかったりするし。脱力するよりもまず先に、素直な加奈さんもまあ可愛いなーとは思ってたんやけど、こんな風に人をからかってこそほんまの加奈さんや、とか思わず納得してしまったさ。てかね。2・3年も一人暮らしなんてしようもんなら簡単な料理くらいはできるようになるよな普通。そこんとこ変な風に捉えられたりしたくないなー俺。そういう加奈さんはほんまに家事とか一切できへんよなってちよつとむくれてゆうてみたけど、加奈さんは苦笑いを浮かべただけやった。きつと10倍は反論がくるって思ってたから、想像と違って俺は少し拍子抜けした。こういう期待ハズレ、とはゆわんけど、想定外の反応をされるとなんだか俺の方が悪いことをしたみたいない気がする。加奈さんが風邪ひいてから、その回数は増えたような気がした。

「加奈さんさー、次に病院行くんっていつなん？ 時間あれば俺送ってくけど」

「んー。確か明後日くらいで最後だよ。薬もらって終わるんじゃないかな」

「そ。午前やったら空いとるけど予約って午前スカ」

「そッス」

「いつもの時間やね。やったらここに迎えに来るわ。待つってな。つーかここ何週間かお疲れさまでした」

「いえいえ、こちらこそいろいろご迷惑をおかけしました」

食事時にする会話やないとは思うけど、なんとなく。ゆっておきたくなっただけ。

その後も何回か病院に行ったり来たりを繰り返して、なんとか加奈さんの風邪も完治し、また以前と同じような生活に戻った。

自宅謹慎状態を解禁して、病院にいく以外で加奈さんが家をはじめでた時のキミカさんの喜びようは、もー語りつくせないほどのすごいもんがあった。そんなに会いたかったんなら加奈さんの看病をしにこればよかったのに、と呟くと即座に飛んできた。鉄拳が。死ぬかと思った。マサキさんやその他店員もめっちゃ喜んでたよ。もちろん俺もやけどな。俺の場合はすでに、できのよい姉、という位置が確立しとるからそこらへんはまあ普通。

んで、また同じような生活に戻った。はずなんやけど……。

「あ、やっぱり？ 出掛けたりもしないんですね」

「そーなのよね。大学終わって遊びに行くぞーっていても、あたしはいいから、なんて言って帰っちゃうの」

「大事をとってあんま外を出歩かないようにしてるってことならわかるけど、風邪はもう治ったんだろ？」

「ええそうです。こないだ病院に行ったら、もう大丈夫ですね、ってゆわれてましたよ」

「おかしーな……。大学には出てきてるからまた病気になることは考えにくいし。ココにも来てないんでしょ？」

「そうなんですよ！ 俺だってメールとかはするけど以前みたいに頻繁じゃないし、ご飯つくりに来いコールもぱったり止みましたからね」

そう、そこら辺がひっじょーに不可解な謎となつとるわけや。体調が完全復活した加奈さんは、以前と変わらず俺を連れて遊びに行ったり（基本はやっぱり無理矢理やねんけど）、俺んちに勝手にあがりこんでご飯を食べていたり（あがりこむだけやったらともかく、遠慮もせんと食べたいもんリクエストしてくるしなあ）、大学帰りで疲れとる俺のことなんて気にもせんと自分の家に連れ込んでご飯を作らせたり（自分でつくろうよとゆー皮肉も通じんみたいやし）。あ、なんか考えると腹立ってきた。

まーね。こうして本人のおらんとこで考えると腹も立つってなも

んやけど、本人がいたらそんなん全く感じへんもんない。なんやろ、
そうゆうところが加奈さんのすごいところよな。

で、俺はそうゆう、なんちゅーの、いつもと違うねんおかしいね
んってことを2人にアピールしたかったのに、この2人は今の俺の
発言を全く違う意味で受け取ったようやった。

「……お前らそんなことやってたんだ？」

「え、や、隣のマンションだし、加奈さんが寝込んでた時だってご
飯つくりにいってたじゃないですか。あの人強引で、俺も断りきれ
ないんですよ」

「聞きました？ マサキさん」

「ばっちり」

「風邪治ってからも行ってただなんて、ねえ」

「うーん。タイキがそんなに手え早いとは知らなかった」

そっちなよ！

「そんなんじゃないませんっ」

いくらゆうても聞き入れてくれん2人はもう放っておく。俺はそ
うゆう冗談を求めているわけじゃなくて、真面目に真剣に話しとるっち
ゅーのに。最近俺の周りで不審なことが頻発しとるから、実は加奈
さんの身にもそんなことが起こるとるんやないかなって思っただけ
やの！

俺なんてしょっちゅう視線を感じるねんけど相手がわからんで、
大学ではかっくんにまで迷惑をかけてしまっとなるってわけ。俺と一
緒じゃなかったらかっくんも快適に過ごせてるってゆっとなるし、多
分、対象は俺ってことで間違いないんやと思うねんけど。しかも、
なんや、さりげに尾行されてるんちゃうかって思うこと数回。俺の
あとをつけてくる不振人物を目撃した！なあってこと、大学の友達
から聞いたことやってある。ま、俺からいわせれば、目撃した時に
捕まえてくれよって感じやってんけど、俺のこと監視してくる人間
がいるってわかっただけでもめっけもんやった。

「そうだ、マサキさんとか、キミカさんの周りでそんなことはなか

ったですか？」

「……」

同時に黙り込む2人。これはこれは、ピンポイントについてもたかって思った。

突っ込んで話を聞いてみると、やっぱり2人にも最近、周りで妙なことが頻発するらしかった。マサキさんは一度不振人物を捕まえそうになったらしいけど、間一髪で相手に逃げられたそうや。残念。せやけど俺ら3人に同じようなことが起こるとなると、やっぱり加奈さんが心配やった。俺らの共通点なんて、Dach Garten関係者ってことしか思い浮かばんし。で、俺ら3人に限ってこんなことが起こるとなると（あとで事情聴取したところによると、他の店員は特に異常もなんもなかった）、加奈さんが浮かび上がってくるわけで。

「やーっば加奈さん危ないめにあつてるような気がする」

「やだなータイキってば。心配するのはいいんだけどさ、ちょっといきすぎじゃないのー」

「え、いきすぎってどうゆうー……」

「こらこら。一応もなにもカナさんはお客様だぞ。そこんとこわかってんだろうな、ええ？ タイキくん」

「わかってますよ！ つーか2人が期待してそうなことなんてなんもないですからねっ」

「ムキになるところが怪しい……。ねーマサキさん。お客とホストができちゃったらどうなんの？」

「んー……追放？」

「だからちやうわーっ」

ま、散々かき回されながらも、最終的にはもう一回俺が加奈さんに潜入するという形で収まりやがった。今度こそ、加奈さんち行くんはキミカさんのほうがいいってゆうたのに、聞き入れへんしっ。

——お前さ、マジでカナさんのこと好きなんじゃないの？

店をでようとしとる俺に向かつてのマサキさんの一言。その時はなんとか普通に返すことができてんだけど、加奈さんちに行く道すがら、俺は顔が、アルコールの所為だけでなく熱くなってくんを自覚していた。

第13話

「……」

「……」

「……加奈さん。さっきの電話、アレなんですか」

「答えたくありません」

「答えてください」

「嫌です」

「でも、あれ明らかに俺らに関係ある電話やったでしょ？ 俺の名前出てたくらいやし」

「……答えたくないって言ってる。それより、鍵、返して」

「それこそ嫌です。これを返す相手はキミカさん。加奈さんは、俺の質問に答えてください」

「いやだっ」

「加奈さんっ」

さっきから、ずっとこの調子やった。

You and I 13.

加奈さんちのリビングで、加奈さんと俺とは、リビングのど真ん中に設置されているテーブルにそれぞれ陣取って、押し問答を繰り返した。

原因は、電話。

マサキさんとキミカさんから“加奈さんちにもう一度偵察に行つて来い” 命令を拝命した俺は、またしてもキミカさんに鍵を借り（今回も押し付けられた、ともいう）、鍵を借りた意味を考えず、また加奈さんちのドアの前で携帯に連絡を入れた。ほら、いくら潜入

してこいだとか偵察に行つてこいだとかを事実上自分より目上の人にゆわれたからつて、それを真に受けることはできんやろ。前にもゆうたけど、女性の家にいきなり入り込むわけにはいかん。たとえば、これまでに何度も家にあがったことがあるとはいえ、そこらへんきつちりしとかな、な。

何故かものすごいドキドキしながら電話を掛けたとゆうのに、生憎というかなんというか、俺の携帯は無情にも通話中であるツー、ツー、という音を響かせてきやがった。やから、今度は目の前にある加奈さんのチャイムを鳴らしたわけ。それでも反応はないし、きつと家にはおらんのかと思つて自分んちに帰ろうとした時やつた。エレベーターホールからピンポン、とエレベーターが到着した音がした。音を聞いて反射的に隠れてしもたんやけど、それが結果的にはよかつた、と思う。もちろんというか当たり前というか、マンションの最上階に帰つてきたんは加奈さんで、加奈さんは歩きながら携帯を耳にあて、語気も荒くしゃべつとつた。

『……から、あたしはもうなにもしていないでしょっ！　だから大樹にも、キミカにも、みんなみんなに手を出さないで！』

その一言を最後に通話を切つて、それからようやつと、ドアの前にしゃがみ込んで俺に気付いたつてわけや。

俺がいることに驚いたんやろね、しばらくの間加奈さんは俺を凝視して、動けんかつた。それでもなんとか氣力がある程度回復させた頃には、自分はリビングで椅子に座つててさらに驚いたつてところやな。さすがにいつまでも玄関前で立ち尽くしていられるわけもないから、キミカさんの鍵を使って家の中に加奈さんを連れて行つたのは俺や。

テーブルで向かい合つて、俺は最近の加奈さんは以前と違つてこと、キミカさんやマサキさんも心配しとるつてこと、もちろん俺自身やつてすごい心配しとつたつてこと、いろいろ喋つた。あ、もちろんリビングに連れてきたんはキミカさんに借りた鍵のおかげやつてことも含めてな。

それで、冒頭に戻る……と。

俺がなんでここにおるんかを理解した加奈さんは、すぐに黙秘権を行使した。だんまりを決め込んで、俺の質問全てに答えたくないってゆうて、そっぽを向いて、鍵返せの一点張り。そりゃ勝手に自分の鍵を貸し借りされたら普通は怒るやろうけど、俺やって今回ばかりはそう簡単に引き下がれへんかった。

「……加奈さん、なんかから俺らを庇っとるでしょ」

「……」

だって、そうとしか考えられん。“だから、みんなに手を出さないで”。この言葉は、そうとしか考えられんでしょ。

相手がなんなんかは全然わからへんけど、もちろんそうされる理由やってわからへんけど、その相手は俺らに手を出さん代わりに加奈さんになんらかの交換条件をつきつけて、加奈さんもその条件を飲んだ。そんなところやろな。

「さっきの電話とは全く関係ないかもしれないけどね……。マサキさん、キミカさん、そんで俺。最近、俺らの周りでおかしいことばっかり起きてるんよ。視線感じたり、尾行されたり、そんなことがね。幸い、まだ誰にも実害はないみたいやねんけど」

「……」

びくり、と加奈さんは微かに肩を震わす。微かだとしても、それは俺にとっては明らかな反応。やっぱ、さっきの電話はこれに関係することやったみたいやね。たまに自分の勘は鋭くて、それを普段はありがたいと思えばいいんかわからなかったんやけど、今回ばかりはほんまにありがたいと思えた。

「ねえ加奈さん。なんでかはわからんけど、俺らはどっかの誰からマークされとって、それを加奈さんは止めようとしてくれとるんよね？　ありがとう」

「……大、樹」

「でもねえ。キミカさんも、マサキさんも、俺やって、加奈さんが自分を盾にしてまで庇ってくれとるんとか、嬉しいと思うやろか？

少なくとも俺は、加奈さんに会えないよりは会えたほうが嬉しいし、もっと根本的な解決を目指したいねんよな。例えば、加奈さんと一緒に、4人で、どっかの誰かが俺らをマークする理由を解消するとか」

そう。俺は加奈さんと会えないよりは会えたほうが嬉しいって断言できる。このまま自分の周りでおかしい出来事が続くとしても、な。面と向かって聞いたわけとちゃうけど、それでもキミカさんやって、マサキさんやって、みんなみんな、そう思ってると思う。そして、その想いは多分、俺が一番強くて。

今まで気付かなかったんか、それとも気付こうとしなかったんか。「……あの、さ。俺やって、多分、基本は加奈さんと同じやで。加奈さんが俺らを庇ってくれようとしてるのと同じくらい、俺やって加奈さんを守りたい、ねん。……俺なんかやったら、手助け、とか、できへんのかなあ」

どんどんトーンを落とし、詰まり始める俺の声。自分がしゃべるとるはずなのに、他人がしゃべっとるように聞こえるんは、今までゆったことのない、自分の正直な気持ちやからか？

そんなことを自覚した瞬間ものすごく恥ずかしくなって、俺は加奈さんにみられないように、焦って顔を俯かせた。いろいろあって落ち着いとした顔色が、またしても熱く染め上がっていく。まさか初心じゃあるまいし、ハタチもすぎたええ大人やっちゅーのに、少しも気の利いたことがゆわれへん。こういう時にこういうことをゆって、こういう行動をとればいいんかとか、全くもってわからへんかった。

必死で顔を隠しつつ、これからどういすればええんやろとか考えとる俺の耳に届いたんは、大きな大きなため息と、加奈さんの小さな声、やった。

「大樹って、どれが素なのかわかんないや」

つつい俯かせていた顔をあげて、加奈さんの顔を覗き込んだ。加奈さんの視線は一直線に下降しとって、表情はよくわからんかつ

た。やけど、なんだか苦笑いをしとるんやなって、そんな雰囲気
を漂わせとった。

「……どれもこれも全部、素なんやけど。ホストん時は口調変えて
るだけであって、ぜーんぶ俺。誰にも自分を偽ったことなんてない
し、それはもちろん加奈さんに対しても同じやで」

「ふーん。素でそういうことが言えちゃうんだもん、やっぱり大樹
にはホストがあってるかも」

「加奈さん、それふざけてゆつとる？」

「まさか。頭ん中がぐちゃぐちゃだから、なにか話していいのか
……」

「いいよ、ゆっくりで。ぐちゃぐちゃでもいいからさ、話してみ
てよ」

俺、ヒトサマの支離滅裂な話を整理するんが得意なんよーホスト
やからな！　そうやって冗談めかしてゆうてみた。

その言葉で、ようやく加奈さんは笑ってくれた。

第13話（後書き）

ようやく微妙な恋愛モードに突入か?!　ここまで来るの……長かった。

ここまで読んでくださり、本当に感謝感謝です。

あともう少して完結できるので、付き合ってくださいるとうれいです!

第14話

——輕蔑、しないでね。

そうゆうて、加奈さんが詰まりながら話してくれたんは、ほんまにありえんほど腹の立つ出来事やった。

You and I 14.

なんてゆうんやろ。きつと、話を聞いたら誰もが怒るっちゅーか……もしくは呆れるっちゅーか、ほんまそんな話やった。今の加奈さんを知ってる俺としては、そんな稚拙な嘘に騙されてしまう加奈さんが不思議でならなかったけど。でも、それも仕方ないかもしれないとは思う。

話としては、よう聞く、よな。いわゆる結婚詐欺ってやつ。

加奈さんは想像通り、良家のお嬢様やたらしくてな。初等部から大学部までの一貫教育を行っとる某有名女子校に通ってたらしい。教員も女性、会う男といえば自分の家族か、はたまた執事か。そんなもんやったから、男に対して免疫がなかったんやろうね。お嬢様やから、愛だの恋だのに夢をみとったのかもしれない。恋愛に対して甘い夢をみてたんは、芽夢ちゃん一直線やった俺も、同じやねんけど。

加奈さんが晴れて高等部の2年に上がった年に、加奈さん曰く“劇的な出会い”を果たしたそうや。

多分それはほんまにホスト崩れてゆうか。世間で聞くところの最悪なホスト像そのものやった。女性を持ち上げるだけ持ち上げて、

結婚の約束させて、お金だけむしりとして、突如として消えうせる最低な、結婚詐欺師ってやつ。

ほんま同年代の男と関わることのなかった加奈さんは、すぐにその男に丸め込まれたらしい。口先だけの甘い言葉とか、そういうのに騙されて、一生懸命親を説得して、しぶしぶ認められた頃にはその男はお金を持って消えうせて。それだけでも女性にとっては一大事っちゅうか、ものすごいショックな出来事なのに、挙句親にも捨てられた。

食うに困らない程度のお金をやるから、今後お前とこの家は関係ないものと考えろ。金輪際、近寄るな。

そうゆって加奈さんを家から追い出して、加奈さんも覚悟を決めてこの家に引っ越してきたというのに、結局一人娘であることには違いなくて、加奈さんの行動を監視して、ことあるごとに様々な妨害をしてくる。俺らの身に起こってる最近のおかしな出来事も全て、加奈さんの両親がらみのことなんやって。特に加奈さんが男と関わりになるのを異常なまでに妨害してくるって。最近では勝手に婚約者までつれてきて、黙ってこの男と結婚するんやったら、昔の話を綺麗さっぱり忘れてやる。つまりはこうゆうこと。

詰まりながら、それでも一生懸命順序だてて説明してくれた加奈さん。話すんは辛かったやろに、話してくれて俺は嬉しかった。それで、話を聞いた俺は、加奈さんの両親のあまりの理不尽さに腹立つし、加奈さんを騙した男っちゅうのにも腹立つし、どういうリアクションをとったらええんかわからなかった。

「……なんつーか、なあ。正直なところゆうていい？」
「どうぞ」

「では失礼して。……ほんまなんに対して腹立てばええんかわからんほど腹立つ話やなそれ！ 加奈さん騙した男も腹立つし身勝手な加奈さんの両親にも腹立つし、自分が加奈さんに対してなんの手助けもできへんかったところにもまた腹立つっ」

突然叫びだした俺に驚いたのか、加奈さんは俯きがちだった顔を

あげて目を大きく見開いた。自分のことを話した上で、俺に軽蔑されるんじゃないかって思っと思った加奈さんにしてみれば、今の俺の発言は理解できへんもんやったのかもしれん。

それでも、ずっと前から、それこそ加奈さんがその男と出会う前から俺が加奈さんと知り合いやったら、絶対に身勝手な両親みたいに加奈さんと縁切ることなんかせんかった。信じとった男に裏切られて、両親からは勘当されて、例えそれがちよつとは加奈さん自身の責任であっても、そんな悲しい目にはあわせなかった。

なんかどどん腹が立ってくる。騙した男も、ふざけた両親も、全部に。

「くっそー……。俺がもつとずっと前から加奈さんと知り合いやったら、絶対男に騙されるようなことさせんかったのに」

「……」

「それでもって、いくら社会的地位があるからって、自分らの体面を守るために加奈さんを勘当するような両親を許さんかったのに。その男をしぶしぶでも認めたんはお前らやろって話やんかー……」

自分の過失も全部加奈さんに擦り付けて、それでもまだ偉そうになに？ “こいつと黙って結婚するなら忘れてやる” やって？ ふざけてんじゃねーっつの。どんなけ加奈さんを傷付けたら氣いすむねんこのすつとこどっこいめっ！

……落ち着け、今は文句をゆうとる場合なんかじゃないやろ。

「よーし、こうなってしまうばやケや。加奈さんの両親に直談判！」
「なっ、馬鹿なこといわないでよ！ あの人たちに逆らったらどうなるかわかんないのよ？！」

「あのねえ加奈さん。ヤケやってゆうたでしよ。逆らったら抹殺される、とかやったらさすがの俺も手立てを考え直すけど、逆らったらどうなるかわからんのでしょ？ わからんだけでしょ？ せやったら俺は直談判しに行く。お前らの身勝手さの所為で加奈さん含め、俺らは迷惑被ってんのじゃーってね」

加奈さんは啞然としたまま。いやでもな、確かに命に危険が迫つとる、みたいな実害はないけど、ほんまに迷惑は被ってるやん。誰ともわからんやつに尾行されて、視線が背中にくちくちく痛い。こういうんも人にいわせれば実害やって思いうかも知れんけど。加奈さんやって、マサキさんやって、キミカさんやって、迷惑は被つとる。そんな人間に迷惑やねんって文句をゆいに行くんは普通やろ。

しかも、俺は加奈さんをここへ運び込むとき、ちらっとみてしもた。家のあちこちに重なつとるダンボールは、多分。

「加奈さんさ、俺らを庇って、ほんまにどこの誰ともわからんやつと結婚する気いやったでしょ」

ワンクッションもおかんとずばり聞いた。ピンポイントでつかれてこれ以上隠し事をする気がなくなつたんか、加奈さんはさらに大きなため息をついた。大きく肩を揺らして、口調はいつもの加奈さんへと戻ってゆく。

「……そうよ。これ以上人に迷惑かけたくないじゃない」

「やっぱり」

自分と関わつとる所為で人に迷惑をかけるんなら、出来る限りこれ以上迷惑をかけないように行動する。そうゆうんはわかるねん。同じ立場、には多分なれへんけど、同じようなことが俺の身にも起こつたとしたら、きつと俺やって同じことするはずや。人に迷惑かけんよう、これ以上迷惑をかけんように関係を絶つ。

わかるんやけど、それでも、今の俺にとつてはそっちのほうが、加奈さんが引越してしまうほうが迷惑やった。

「俺は、ね、加奈さん。確かに視線感じて気持ち悪かったりしたし、加奈さんがそこまで俺らのために頑張ってくれてたんはすごい嬉しいんよ。でもね、やっぱ、俺にとつてはやっぱり加奈さんがいなくなるほうが嫌やねん。加奈さんからのメールがないと寂しいし、半ば強引やけどご飯作らされて一緒に食べて、美味しいってゆうて笑ってくれる加奈さんの笑顔とかほんま好きやし、そういうんがなくな

なると、うん、嫌やなって思うねん。一緒におったらもつと話したいって思うし、もつと遊びたいって思うし。多分、俺は加奈さんが好きなんやと思うんよ。同じ気持ちでいて欲しいとかそんな欲はないけど、それでも一緒におりたいなって思う。加奈さんが、心から望んで親から押し付けられた婚約者と結婚したいって思っとるんやったらしゃーないって思ってた諦めるけど、そうやないんやったら、もうちょつとこっちで暮らさへん？ 加奈さんの親には俺らも一緒に立ち向かうからさ」

自分の言葉で、自分の気持ちがどれだけ加奈さんに伝わるんかはわからなかった。けど、今を逃したらきつと一生加奈さんに自分の気持ちを伝えることはできなくて、それで後悔することになる。やから、拙くても飾らない自分の言葉で、ほんの数時間前に気付いた自分の気持ちを、加奈さんに伝えた。どっちの手を取ってくれるんかはわからへん。そんな雰囲気の中、俺は恐る恐る加奈さんの反応をうかがう。

俺らか両親か。反抗か従順か。考えた末に加奈さんの選んだ道は、出した答えは、今までみたこともないくらい優しい顔に流れ落ちた一筋の涙が教えてくれた。

第14話（後書き）

恋愛テイスト……入れようとしたが、入れすぎて失敗しました
（汗）。ポエマーすぎるうう。。

でも、私的に満足ですよ、ええ！

残り3話くらい！ よろしくお付き合いくださいませ♪

第15話

「……多分ってかきっとってか、なんか以前も同じ質問したかも知れんけど、もっかゆうね。加奈さんて何者?!」

You and I 15.

俺らの目の前には、純和風の大邸宅があった。

あの後、加奈さんの両親に反抗するにはなるべく早い方がええやろってことでマサキさんに話をつけてからすぐに俺らは、朝一の新幹線に乗って加奈さんの両親が住む京都に向かった。そう、京都や。俺の故郷でもある、京都。そんな場合やないってわかつとるけど、それでもやっぱ久々に自分の故郷に帰れるんは嬉しかったし、気が高ぶってたんか寝てないためか、新幹線の中で寝入ってしもた加奈さんの寝顔をみるんもなんかドキドキした。

……いやいやヘンタイとちゃうで? 好きな人が、自分の傍で安心して眠ってくれるって、そりゃ誰やって嬉しいやろ!

2時間くらい新幹線に乗って、俺らは朝の8時半に京都に到着した。あーやっぱ東京と京都の空気って違うよなあ……久々や。場違いにも思いつき息を吸い込む。見れば加奈さんも同じこととして、思わず2人して笑ってもうた。

新幹線を降りてからの交通手段はバスかタクシーか、選択肢は2つあってんけど、一応朝早いしバスはあんまりでとらへんってことでタクシーで移動することにする。懐かしい光景を窓越しに眺めながら、大体駅から30分くらいかな。それくらい走ったところに加奈さんの実家はあった。

最後の2分くらいはずっと続いとる木造の塀に沿って走って、

こんなでっかい家は掃除すんのが大変やんなあ住んどるんは代議士か？、なんて考えとったところに加奈さんからの“これがあたしの家だよ”てゆう発言。そんなあつけらんかとゆわれても、あまりの家のでかさに俺は呆然とするしかできんかった。これからラストバトルやってゆうのにそんな感覚がまるでわかんし！

想像もつかんくらいの坪数、奥の方に見える純和風な平家屋。駅前の喧騒はどこへやら、ここら一体はものすごく閑静な住宅街というかなんというか、もちろん周りも日本家屋が立ち並んでるけど、そのドンって感じやな、この家は。聞こえるのは風の音だけ、そしてどこからともなく一定の間隔でかぼん、かぼん、とししおどしの音がする。それだけ。

俺んちやって一応世間的には豪邸とゆっても差し支えのない建物やけど、それでもどこか洋風が混じってるからな。ここまで純和風な建物なんて見たことない。もちろん、親父に連れられて行った先でも。

ほんま加奈さんて何者やねんやろ。つか、加奈さんの両親も何者？　もしかしくなくても、とんでもないオヒメサマを好きになってもたんかも、俺……。

そんなふざけたことを考えとった俺と違って、加奈さんの表情はかなり険しい。眉間にしわを寄せて、ちょっと俯き加減で。実の両親に会うだけでそんなに緊張しとるんやっと思うと、なんか、やっぱり加奈さんが可哀相になる。思わず加奈さんの手をぎゅっと握り締めると、驚かせたみたいでちよっと全身に震えが走った。

「だーいじょうぶ。なんのために俺が隣にいたいと思ってるの？」

もちろん俺みたいな青二才が加奈さんの両親にどうこうゆえる立場やないってことくらいわかつとる。相手には地位も名誉もあるけど、今の俺自身にはなんもないから。こればかりはなんともできん。けど、それでも加奈さんに少しでも安心して欲しくて、出来る限りの笑顔をみせた。ゆっくり加奈さんの身体から緊張が解けていって、少しぎこちないけど笑顔が戻ってくる。

「よし、加奈さん。ついにラストバトル突入や……って、お？」
——たららったったっくん

気合いれて呼び鈴を鳴らそうとした矢先、俺の携帯にメールが届いた。呼び鈴まであと1cmってところで止まっとなる右手を慌てて引っ込め、急いで到着したメールを覗き込んだ。要件のみが簡潔に書かれたメールをみて、息を吐く。俺の予想は見事当たった、よかった。よし、これで大分気持ちに余裕が出来たで。

「大樹？」

繋いだままの手を軽く引っ張って、加奈さんが話しかけてくる。そうやった、このメールに関しては加奈さんにもゆっくらんのやった。思いついたんは新幹線の中やし。加奈さんは寝とったしな。今ゆうべきか否か迷ったけど、どうせあとでわかるねんから別に今ゆわんでもええか、うん。

「んーごめん。こうゆう時はきちんとマナーモードにしとかんとな。あ、電源切ったほうがええんか」

携帯の電源を切って鞆に仕舞いこむ。改めて深呼吸をして、気分を切り替えた。

「よし、改めまして、加奈さん。ラストバトルに突入するで。準備はオッケー？」

「大丈夫。もう後には引かないんだから」

「きゃーもう加奈さんってばカッコいい！ 惚れちゃいそう☆」

「もう惚れてるんじゃないの？」

「……そうやった」

視線を合わせて一瞬の後、同時に声をあげて笑ってしもた。そんなリラックスした状態のまま、気を取り直して呼び鈴を鳴らす。そうや、なにも悪いことなんてしてへんのやし、気負わんといったらええねん。

1回呼び鈴を押してから、数十秒か、数分か。それくらい待って、ようやく中から反応があった。それも呼び鈴を通して声が聞こえてくるとかやなくて、突然玄関の引き戸が開いて、60〜70代くら

いで品のいい、髪が真っ白のおばあさん、ではなく女性が出てきた。女性は何の目に立つ加奈さんを見て、嬉しそうに頬を緩めた後、即座に中に招き入れてくれた。この時にはもう手を解いたけど、ゆっくり歩き出す加奈さんにつられて、俺も恐る恐る豪邸に1歩を踏み出した。

1度確認しよう。そう思って、左腕にはめていた腕時計で現在の時刻を確認する。今の時刻は9時ちょっと過ぎ。正直にゆおう。今日は、とりあえず平日で、今は、平日の朝の9時過ぎや。いくらなんでも平日の朝には会社とかに行ってるやろうと高を括ったんだよ、俺は。やけど、なんでやろう。今、俺と加奈さんは、20畳くらいありそうな客間で、中央に鎮座しているこれまた大きな机を挟んで、加奈さんの両親と対峙しとった。

イメージ通りというべきか、加奈さんの両親はどちらも和服を着て座っている。お父さんの方が濃い紺色で、お母さんの方が淡い桜色ってゆうんかな。2人とも細身でシャープな顔立ちをしてるから、和服姿がすごい似合っとな。なんてゆうんやろ。厳格な父、温かな母、とゆわれて思い浮かべるイメージそのままという感じ。

思わず加奈さんの両親をじっくりと見てしまいつつ、なんでこんな時間におるんやろ、と内心考えてまう。そんな俺をよそに、加奈さんの両親と加奈さんの話し合い、というよりは口論というべきやな。は、どんどんと進んでいった。

加奈さんが

「父さんたちがやっていることは犯罪よ。大樹達は詐欺師とは違うから、これ以上の迷惑はかけないで」

と怒鳴ると、加奈さんの両親（主にお父さんの方な）は

「詐欺師でなくても、どこの馬の骨とも知らんやつらと付き合うのは断じて認めん」

と、こーや。お母さんの方はなにをゆうでもなく黙って日本茶を飲んだ。

うーん、なんやもう、これって普通に親子喧嘩やと思うねんけど。冷静かつ客観的に見てみると、ただ単に、お父さんは娘の身が心配で、加奈さんはお父さんに子離れして欲しい。そんな感じにみえる……俺だけか？

ぼんやりそう考えているうちに、お母さんは1人落ち着いて日本茶啜ってるし、2人の口調は激しくなってるし、思うように口を挟めんと、どないすればええんやろって困り果ててしまった。でも、その時にまたお父さんが「どこぞの馬の骨とも……」とゆう発言をしてくれた。

しめたって思っ、て、すぐさま反論しようとしていた加奈さんを遮って口を挟む。

「失礼！ ええと、瀬谷さん。今、“どこぞの馬の骨”と仰いました、僕たちのことについて調べられたりされなかったんでしょか」

「ホスト崩れの身上など調べなくてもすぐわかるわ。この際だから言っておく。これ以上加奈に近づこうとすればこちらも本気で対応させて貰うぞ」

「……そうですか。では、こちらを読んで下さい」

そういつて俺が傍らに置いといた鞆から取り出して差し出したのは、なんとゆえばええんかな、履歴書をもっと詳しくしたようなもの。簡単にゆうと、出身や今までの経歴をまとめたもんや。

お父さんは興味すらわかんのか触ろうともせん。もちろん俺やって簡単に見てもらえるとは思っとらんかったけど、どうにかして読んでもらおうと考える前に、今まで黙って日本茶をすすっていたお母さんがばらりぱらりとめくり始めた。

「こら、お前は、なにをこんな若造の言ってることを真に受けて」

そう怒鳴りつけたお父さんの目の前に、お母さんは最初の1ページ目を開けたままの状態で履歴書を差し出す。思いがけず目に入った文字に驚いたんやろう、お父さんの目はこれ以上ないほどに見開かれた。

「……父親は、錦戸、祐馬？」

「そうです。僕は、瀬谷さんと親しくさせていただいている錦戸祐馬の、息子です」

さきほどまでの勢いはどこへ行ったのか、加奈さんの両親は驚きに目を丸くしながら、俺を見詰めていた。

第15話（後書き）

読んでいただき感謝です♪ ようやく15話を書き終わりました。。
前回くらいに“あと3話”とかいつてましたけど、また、ごちゃご
ちゃ書きすぎて

伸びそうな予感が……！ まずい、このまとめられなさをどうにか
せんと。

説明書きのようになってしまったのも反省点の1つです。次回こそ
……！

読後の感想やメッセージなどいただけると幸いです。今後の糧にし
ます！

ぜひぜひよろしく願いしますね〜

第16話

……加奈さんのお父さんに凝視されることおよそ3分弱。そんな見詰められると恥ずかしい……なんて冗談ゆうとる場合やあらへんけど、それでもそろそろ話を先へと進めたいなと思う。だからって迂闊に話しかけれへん。きっと今、加奈さんのご両親は頭ん中かなり本気で俺のこと、値踏みしとるはずやしな。

せめて印象だけでもよくしとこうと思って、にっこり笑顔を続けとる……んやけど。何事にも限度っちゅーもんがあるからな。そろそろ顔の筋肉がひりひりしてきた。ちよつとどころやなくてかなり痛い。確実に明日は筋肉痛やな、こりゃ。

You and I 16.

お母さんは最初の1分ほど俺のこと値踏みしとったようやけど、その後はやっぱりマイペースで日本茶を堪能してる。きつと、お母さんは放任主義や。勝手にしなさいなって感じで最初っからあんまり口ださんかったしな。

と、いうわけで俺の目下の敵は、加奈さんのお父さん。お父さんは身上書の1ページ目に書いてある錦戸祐馬という名に反応し、未だ俺のことを凝視している。

——ちよつと卑怯な手かもしれないって思ったけど、相手は地位も名誉も持つてて、俺みたいないな青二才はほんまに齒牙にもかけんつか相手にすらならんや。やから、俺の父親の名前、話の取っ掛けりをつくるために出させてもらった。

俺の父親は、いつかゆうたかも知れんけど、某企業の社長さんで、それなりにコネを持っているというか、経営陣トップクラスの人た

ちと幅広い交流をしているわけ。いくら現役をほぼ90%退いたからって、長年の知人ゆうのは名前くらい覚えられとるらしいね。

兄貴からのメールは、実はこのことについて。同じ京都という土地でほぼ同じ地位についている人間やねんから、きつと知り合いなんちゃうかなって思ってた兄貴に確認してもらったんや。あ、何故兄貴經由なんかच्छゅーと、俺の父親、古い頭でな。携帯のメール機能を使いこなせへんってわけ。寝てる加奈さんの隣で電話するのもどうかと思ったんで、兄貴經由のメールで聞いてみたんやけど、ほんまどんぴしゃに当たるときって当たるねんなあ。

まだまだお父さんが俺のことを凝視しよる中、加奈さんがちらっと俺の方を向いたのがわかった。少しだけ視線をずらして加奈さんを見ると、加奈さん、ものすごい不安そうな、ワケわからんって感じの顔しとる。多分親父の名前を出した時点で俺の評価は“どこぞの馬の骨”ではなくなっただけで、まあいいかと思って加奈さんに小さく微笑みかける。大丈夫やから安心してっていう意味を込めて。視線を合わせて口元に笑みを浮かべた程度やけど、加奈さんはそれだけで安心してくれたように、やっぱり綺麗な笑顔をみせてくれた。

これからは、こんな加奈さんの笑顔見放題なんよな。うーん、幸せ……。

「……錦戸祐馬の息子だと？ 確かに、あいつには息子が2人いると聞いていたが」

たっぷり5分くらい待ってから、ようやく我に返ったようにお父さんがぼつりと呟く。なんのために息子の人数まで話してるんかはこの際考えんことにしよう。どうせ世知辛い世の中や。政略結婚とか政略結婚とか政略結婚とか……ってことはつまり加奈さんと政略結婚？ …… いいかもしれない。ま、そんな時は絶対に兄貴が相手になるやろうけどな。

「父の跡は兄が継ぎますので、僕は比較的自由な生活をさせてもらっています。とはいえ、将来的に兄のサポートにまわる可能性もある

るので、経営などの勉強はさせられています」

「そうだろうな。お前のような優男がトップに立てるわけがない」

「お父さん」

ちくちく刺してくるようなお父さんの発言に反発してか、声を荒げてくれる加奈さん。俺はマゾでもなんでもないけど、別にこの程度の発言、嫌味であると認識すらしていない。今までやって兄貴と比べて出来の悪い俺のこと、ごちゃごちゃゆうてくる人間山ほどあったしな。大抵は俺のいないところで、親父や兄貴にゆうてたみたい。度胸据わった人間は、俺を目の前にして、直接俺に向かって「錦戸家の人間ともあろう者が」うんちゃらんちゃらとかってゆうてきたんやけど、陰でゴチャゴチャゆわれるよりは、こっちのほうがよっぽどすっきりしてた。と、まあこんな経緯があって、目の前でなにをゆわれようがほとんどの発言を右耳から左耳へスルーすることが簡単に出来るようになったんよ。だからこのお父さんの発言やって正直なところなんとも思わんのやけど、加奈さんが俺のことを思って実のお父さんに向かってくれとるんやったら、それはなんか、やっぱり幸せなことやなあ。そう、思う。

「こらそこの青二才。なにをニヤニヤしておる」

「え？ いや……。自分の好きな人が、自分のことを考えてくれるってことがすごく嬉しくて」

本人の前で思わず惚気てしまう。一拍の間の後、加奈さんの顔はゆでだこみたいに真っ赤に染まるし、加奈さんのお父さんは怒りで血がのぼってきたのかやっぱり顔を赤く染めるし、お母さんはやっぱり動じずに日本茶をすすってるし。

自分の好きな人、加奈さんが、俺のことを考えてくれている。思ってくれている。それだけですごく嬉しい。やっぱ、俺には加奈さんしかおらんなあって思う。つい数ヶ月前まで、芽夢ちゃんのことを諦め切れなかったって方が夢みたいや。

「加奈さんのお父さん」

「お前にお父さんといわれる筋合いはないっ」

「じゃあ瀬谷さん」

「……なんだ」

「単刀直入にいいいます。僕は加奈さんが好きです。結婚させてください」

あ、思わず本音が出てしもた。いいたいのはこれだけじゃなかったんやけど。少しだけ言い直そうと思って視線を戻すと、加奈さんのお父さんも加奈さんも、頭から魂が抜け出しそうになってた。何故？ お母さんの反応はというとちょっと目を見開いたくらいで、やっぱりマイペースにも空になった湯飲みに日本茶を注いでいる。

とりあえず話を進めるために、魂を身体に戻してもらう必要があるなあ。殴ったら元に戻るかな。腕を組んで思案している俺に声をかけてきたのは、両手で湯飲みを握り締めているマイペースなお母さんだった。

「……錦戸大樹さん。この我俣娘のどこに惹かれたんですか？」

「加奈さんは別に我俣ではないですよ。少なくとも僕の前では」

「娘に対する惚気を親の前で口にするのはやめておいたほうが賢明ですよ」

「す、すみませんでした」

温和な母親像を思い浮かべていただけに、惚気禁止令を発動させたときのお母さんの眼光が鋭すぎて、思わず背筋に悪寒が走った。たった数語のやり取り。やけど、それだけでもう、この場合は俺とお母さんとの一騎打ち状態になって、加奈さんもお父さんも固唾を飲んで見守っている。逆にゆえば、2人ともお母さんの気迫に口を出せへんようやった。瀬谷家の裏を仕切っているのはお母さんやねんな。甘くみてたら怪我をしてまう。気を引き締めていかな！

「言い方を変えましょうか。加奈が過去、どんな目にあったか、またどんな馬鹿な真似をしたのかご存知ですか？」

「結婚詐欺についてでしたら知っています。そのために瀬谷家と縁を切らせられたこと、だけど一人娘だから家を継がせる必要があった、それで僕らと加奈さんを引き離そうとしたこと。ついでに言う

なれば、僕らを監視下に置いて加奈さんを困らせていたのも瀬谷さんである、ということぐらいまでは知っています」

「そうですか……。まあ、その程度はわかっていただかなければ困りますけれど」

俺の発言に満足してくれたかどうなんかはわからんけれど、すこしだけ口元に微笑みが浮かんだ。そして湯飲みに半分程度残っていた日本茶を一気に飲み干してこっん、と湯飲みを木製の大机に静かに置いたときには、お母さんはまた元のように温和な母親に戻っていた。あの眼光の鋭い裏ボスの一面と、この温和な雰囲気をもった日本の母的一面を使い分けているんか。あーもー、俺なんてまだまだ足元にも及ばんか。もっと修行せんと、あかんな。

第16話（後書き）

前回更新時より約3ヶ月とちょっと。。ようやく……更新できました……！

お待ちいただいていたみなさま、すみません。そしてありがとうございます。

もう少しで最終話に到達できる（予定です）ので、それまでお付き合いいただければ幸いです。

では！ 詩斗でした。

第17話

お父さんと加奈さんにも魂は戻ってきたようやけど、それ以上の話し合いは必要なかった。というか「大学を卒業して、ホスト以外の職業で加奈を養っていけるようになってから出直して来い」とのお父さんからの言葉を最後に、この日の面会は打ち切りになった。どうやら、お母さんとのやり取りで、全ての決着がついたらしい。あーよかった……。

You and I 17.

「……緊張しすぎて喉からっからだよ俺」

「あはは。大樹めっちゃくちゃ普通ぽかったのに」

面会終了後、尻を叩かれるように超豪邸から急いで出てきた俺らは、とりあえず駅前に戻って個人経営みたいな小さい喫茶店に入った。道路脇に建っているわりに店内は静かで、耳を傾けると微かに心地ええ音楽が流れとった。小さくてはつきりとは聞こえんからあんまり歌詞の意味はわからんけど。メロディがゆったりした気分にさしてくれる。

もちろんそれだけじゃなくて、客の回転数を考えてぎゅうぎゅうにテーブルと椅子を敷き詰めているファーストフードなんかと違って面積に対してテーブルと椅子の数が少なくて1つ1つが広々と設置されとるから、周りを気にせずにのんびりできる感じやった。開店直後だというのにカウンターや窓から店の奥に向かって縦一列に並べられとる4つしかないテーブルが半分ほど埋まっているところからして、そんな雰囲気にかれた常連さんが多いのかもしれない。客は俺らみたいな20前後から上限ないくらい幅広い年齢層で、そ

れでもそのほとんどがコーヒーやら紅茶やらを片手に本や新聞なんやをマイペースで読んどった。

カウンターの中では、白いシャツの袖を肘まで捲り上げて、本当に幸せそうな笑みを浮かべた店長さんが洗い物をしとる。こうやって自分の作りだした雰囲気が好きやってゆう人がおるんて幸せなんやろな。これ以上の幸せはないっちゅーくらいな笑顔をみるんは、俺にとってもすごい幸せ。

人間がたくさんいるにも関わらず、静かで、心地ええ。聴こえてくるんは店内に流れとる洋楽か、カウンターからの水音、新聞を捲くる音だけ。こりゃ、加奈さんがこっちにおる時に常連やったわけやわ。俺んちの近くにこんな店あったら、絶対俺やって常連なつとるし。

こっち離れてからかなり経つとゆうのに、店長さんは加奈さんのことを覚えとったらしい。チリンチリン、とドア上縁に掛けられとる小さな鈴の音を響かせて店に入った俺らをみて、細い銀縁のメガネの奥にある眼を少しだけ見開いた後、眦を下げてとても優しい顔でお久しぶりですってゆうてくれて。一番奥のテーブル席に向かいあつて腰掛けてから、俺らが特に注文することもなくしばらくして出されたのんは、加奈さんの常連時代にいつも注文していたちゅーウヴァのミルクティセット。2つの、これジノリのベッキオか？ カップにもソーサーにも薔薇の絵柄が描かれたティーカップに、これも多分同じシリーズだろう、小さめで角が丸みを帯びた四角い皿に数枚のクラッカーが乗った。見た目にもキレイやし、紅茶もセットをテーブルに持ってきてから客の目の前でカップに注ぎいられてくれるというサービス付きや。

「覚えててくださっただんですね、ありがとうございます。お久しぶりです、マスター」

「ええ。加奈さんも、また来てくださって光栄です。どうぞ、ごゆっくり」

加奈さんも店長さんも、これはなかなか親しげとゆうんでないの

？ ……ちょっと妬けるけど、出会ってからの年数に大きな差があるしな。しゃーない、我慢しとこ。

さすが紅茶専門店て銘打ってるだけあって、紅茶はめっちゃ美味かった。紅茶ってこんな美味かったっけ？ そう思うくらい美味くって、思わずティーカップの中で揺らめいとる紅茶とマスターとを交互に凝視してもてた。そんな俺に気付いてか、加奈さんは口角をあげてまさしくにやりって感じに笑う。

「なーに、大樹ってばマスターのファンになった？」

「ファンってゆうか、俺、多分こんな美味しい紅茶飲んだん初めてやと思う……」

半ば呆然としながら呟くように答えると、加奈さんは嬉しそうに微笑む。

「そーねー、ここすっごく美味しいもんね。あたしもさ、この紅茶飲んでから他の喫茶店とかで飲めなくなっただもん。コンビニとかで売ってる紅茶とかも飲めなくなっただ、紅茶を飲むのは自分で淹れたときか、ここに来たときだけ。しかも最近色々あったからね。ほんと久々に美味しい紅茶飲んだー」

掌に収まるくらい大きめな、ちよつと形の歪んだクラッカーをリスみたいにカリカリかじりながら「これこそまさに至高の幸福……」とか呟いとる加奈さんは、ほんまに幸せそうやった。全身から力が抜けて、目も口元もずっと下がりっぱなし。なんや、このお店には人を幸せにする魔法でもかかっとなのかな。

「……ところでさ、大樹」

「なに？」

そんな風に幸せそうな顔を少し強張らせて、加奈さんはちよつとだけ真面目に俺を呼ぶ。当面の心配事が解決したわけやから心の痞えがなくなっただけ、俺もこの素晴らしく美味しい紅茶を堪能してたんだけど、いや、だから、やな。加奈さんの声色と表情に少なからず戸惑いを覚える。

「どうしたん？ 加奈さん。ちよつと顔が怖いことになっとなるよ」

「顔については放っておいて。……あのね、家をでる前にあたし、お母さんに呼び止められたでしょ」

「? うん」

そう、俺らが豪邸からたたき出されるホント寸前に、加奈さんだけがお母さんに呼ばれて、その場に残された俺とお父さんは非常に気まずい雰囲気やったんよね。そりゃそうや、たった一人の大事な娘を奪いに来た若輩者やもんな。こりゃ今後のお父さん攻略が大変そう……。で、そんな時になんかお母さんにゆわれたみたいで、加奈さんは戻ってきてからちょっと暗い表情しよってて。それでもここに来るまでにはまた普段の明るい加奈さんに戻ったからそこまで気にはせんかってんけど。なんや、難しいことでもお母さんにゆわれたんかな。

「大樹たちのこと、最初はお父さんたちも知らなかったんだって。だからある程度あたしのことも放っておいてくれたし」

「そういえば……視線感じるようになったんで、加奈さんと出会ってから大分経つ最近やったよな。どうしてこんなにタイムラグがあるんやろ?」

「それが……ちょっといいにくいんだけど……」

加奈さんの声がどんどん小さくなっていく。いくら静かな店内とはいえちよっと聞こえづらくて、俺は音をたてんようにカップをソーサーに戻してからテーブルの上に身を乗り出した。

「いいにくいんだけど、なに?」

多分促しすぎたら話しづらい性質。だから、俺は加奈さんが自発的に言い出せるまでちよっと待つことにした。加奈さんは少し顔を俯かせて迷ってたようやったけど、洋楽が一曲流れ終わると同時に、決心したように顔をあげて俺と視線を合わせてくれた。

「少し前、ある会合がここで行われたらしいの。一応うちのお父さんもそれに呼ばれたみたいで、お母さん曰く、その会合から帰ってきた時にはもうすでに大樹たちのこと知ってたし、まだ調べ始める前の段階からホストのバイトしてるって気付いてたって」

「……つまり、鍵はその会合にあるっちゅーこと？」

「そういうこと。あのね、その会合、なんか全国の有名な社長とか取締役とかそんな雲上人が交流を深めよう、みたいな感じで非公式にやってる会合みたいで、今回のその会合には、うら若き辣腕女取締役が1人出席してたって」

「うら若き、辣腕の、女取締役？」

「バリバリのうら若きキャリア・ウーマンで、大樹とあたしが知り合いで、さらに大樹はホストだって知ってる女の人。1人だけ、心当たりない？」

「……早めに東京戻って、連絡しよか」

——また来ます、とマスターに告げてから店をあとにする。名残惜しいけど、美味しい紅茶はほんまに全部が解決してから、もうちょっとゆっくり味わいに来ることにした。マスターは、やっぱり親が子供を見守るような優しい目で、お待ちしております、とゆうてくれた。

なんでこうゆうことをするんかわからへん。やけど、あの人が今回のきっかけになったことは変わりない。

それはもちろん、ちょっとした座興やったかもしれんし、人間どこでどんな風に繋がってるかわかりませんね、みたいな話をしただけかもしれない。やけど、その後にお父さんが取った行動から、ただの世間話として提供されたとはどうしても思われへんかった。

(どうしてそんなことするねんやろ、サクさん……)

焦る気持ちを抑えつつ、俺らは一路東京を目指した。

第17話（後書き）

今回は少し、状況描写を頑張ってみました。
風景が少しでも映像として想像しやすかったらよいのですが。

第18話

「ばれるのも時間の問題だとは思っていたけど、予想よりも少しだけ早かったわねえ」

ちょうど駅に着いた直後に出発する東京行きの新幹線があったから、俺らは急いでそれに飛び乗った。その中で、加奈さんと2人ドキドキしながらサクさんの携帯に連絡をしてみると、拍子抜けするほどあっさり本人が出てくれて。そしてこっちからなにを言うでもなく、サクさんの方から加奈さんのお父さんに、俺について出鱈目交じりに話したのだと告白してくれたんや。

You and I 18.

3日後、正午ちょっと過ぎ。俺はリビングにある黒皮の2人掛けソファの真ん中に浅く座って、ゆっくり深呼吸していた。膝に肘をつき、手を組んで額をのせる。何度も何度も深呼吸したところで、上がっていく脈拍は抑えられそうもない。

普段やったら大学に行って、もうすぐ講義が終わるなー今日はなに食おうかなー、なんちゅーことをかっくんに相談したり、教授の声が聞こえないだろ、とかっくんから反撃を受けとる時間帯。やけど、今日は多分大学行く以上に重大なことがあるから、ノートはやっぱりかっくんに頼んで俺は現在、自宅待機中やった。詳しくは話しとらんかったけど、普段とは違う勢いみたいなんが出とったんやろう、かっくんも今回ばかりは大人しく自主休講を認めてくれた、あとでちゃんと話せよって条件付やったけど。ほんま、俺ってばええダチいっぱい持つてるよなあ。

一応チキンライスやサラダ、コンソメスープというメニューの昼食は用意しとる。けど、今はまだ食べられへんし、その前に俺には、腹が減つとる自覚もなかった。適度な緊張は人間の能力を高めてくれるってゆうけど、なんでも過ぎてしまったらあかん。

「……遅いね」

キッチンテーブルに陣取り、やっぱり少なからず緊張しとるんやろう、表情を強張らせた加奈さんが呟いた。

本当は、連絡取れたらその足でサクさんに会いに行くつもりやってんけど、さすが取締役というべきか、俺らはよくてもサクさんのスケジュールはいっぱいいっぱい。なんとか調整して時間作れたんが、今日。ちようど会う直前の用事がこのマンションの近くであるらしくて、それならば俺んちで集まろうってことになった。

サクさんは用事が終わればすぐ来てくれるってゆうて、つまりそれは昼食をとらんと来るってことで。場を和ませる&自分の緊張をほぐす為の1つの手段として昼食を作ったわけやねんけど、うーん。腹も減らんし、サクさんも来んし、食材が無駄になりそうな気がするなあ。や、無駄にする前になんとかして胃袋に収めようとは思つとるけど。

サクさんが来んことには物事が始まらるので、緊張してじりじり時が過ぎるのを待ち続ける俺らにとってはこの時間がある意味拷問やった。ふっと顔をあげてみると、みっともないくらいに両手が震えとる。このまんまやったらまともに話なんか出来るはずがない、せやから紅茶かなんか飲んで気を紛らわせたろと思って、俺は席を立った。

その瞬間、なんの前触れもなく、チャイムが鳴った。

俺と加奈さんは反射で、同時に身体を震わせる。その姿勢のままお互いの視線が交わって、また同時に頷いた。キッチンに向かおうと思ってた足を玄関に向け、急かされるようにドアの鍵を開けた。

「サクさ」

「だーめーよータイキ！ オートロックじゃないんだから、誰か来

るのかわからないでしょ？ チャイムが鳴ったらまず訪問者確認！

それからドアを開ける！ OK？」

「……OKです」

「全く、管理人さんがいるとはいえ、この世の中物騒なんだから、防衛はいくらしたってし過ぎることはないのよ。私だったからよかったようなものの、心無い犯罪者だったら今頃タイキは殺されてるわね。ま、そんなことはともかく、時間もないから上がらせてもらうわね」

俺の鼻先に右の人差し指をつきつけて左手を腰にあてたまま、サクさんは俺がどうにか理解できる程度の早口でゆうた。予想外の出来事に、俺はろくな反応も出来ずサクさんが自分の横をすり抜けて5cmほどのヒールがあるパンプスを脱ぎ、リビングへと進んでいくのをみているだけやった。やけど、

「時間がないって言うてるでしょ！ 早く来なさいタイキ！」

……そうやって怒鳴られては動くしかないでしょう、うん。妙齡の女性に怒鳴られて嬉がる性癖でもないし、自分がちょっと情けなくなるなあ。。

急いでドアの鍵をかけ、リビングへと戻るとそこではサクさんと加奈さんとお互いに自己紹介をしていた。そうやそうや、忘れとったけど、俺は2人を知っとっても2人はお互いを知らんのや。いろいろ話は聞いとるんやろけど、直接店で会ったことなんかないしなあ。そんなわけで、過剰なくらいに丁寧に自己紹介をし続ける2人を尻目に、俺は出来とったチキンライスとスープを暖め始めた。なんか、驚いたら氣い抜けてもて、いきなり腹が減ってきたんよな。なんちゅーんやろ、普段のサクさんと変わりないから、安心したんやろか。

俺がキッチンでいろいろやり始めると、必然的に物音がするわけや。その音を聞きつけてか、加奈さんと一緒にお辞儀を繰り返したサクさんがこっちを向いた。

「……あら？ タイキつてば料理できるの？」

「俺一人暮らし中だよ？ 料理しなきゃ食べるものがないでしょ、育ち盛りなのに。っーか食事は大切なエネルギー源なんよ。食べんと頭が働かないのです」

「あ、大樹の作る料理は本当に美味しいんですよ！ お腹いっぱいでも、それ以上に食べたくなるくらい。だから女性の敵なんです」

「加奈さん……そんなこと言いつつ、いつもご飯作れて強請るの誰？」

「あ・た・し☆」

「――サクさん、準備ができたからこっちへどうぞ」

「あらありがとう」

「大樹ー。あたしは？ あたしは？」

「……どうぞ」

加奈さんも今までの緊張はどうしてんってくらいに普段どおりになってたから、なんか一気に肩の荷が下りたっちゅーか、気が抜けたっちゅーか。とりあえずはまず食事やな、うん。腹が減っては戦ができへんのやで、昔っからな。

キッチンにあるテーブル、ほんまは2人用やねんけど、今日は無理矢理にイスを3つ並べてみた。円形やったんが幸いやったなあ。ここらへんは、俺がここに引っ越す前に家具一式を選んだ拓斗のセンスに感謝かも。深めの白い丸皿にチキンライスの赤が映えてめっちゃ旨そう ……。

あ、でも俺と加奈さんはカットソーとジーンズっちゅーカジュアルスタイルやけど、サクさんは真っ白いデザインスーツにスカイブルーのシャツ。忙しい仕事の合間を縫って来てくれてるねんし、万が一にでもスーツを汚してしまったらマズイやろなあ。この後の仕事に差し障りがでると思うし。そんなわけで俺は何かナプキン代わりになるものを探しに立ち上がった。不思議そうに見遣る2人には食事を勧めておいて、隣の寝室に入った。入り口の真正面に、これまた拓斗が残していったクラシック調の4段筆笥がある。多分上か

ら2段目に服以外のものいれとったと思うねんけど、ナプキン代わりになりそうなんなんかあったかなー。手を伸ばして引き出しを開けると、案の定ナプキンじゃないけど代わりになりそうな無地の
大判ハンカチが何枚か。ま、フルコースなわけでもないねんし、これで我慢してもらお。

「はい、サクさん。加奈さんも」

ハンカチを2枚掴み、律儀にも俺を待っていてくれたんやろう、料理に手をつけとらんかった2人に手渡す。2人は目を瞬かせて、それでも意味を理解してくれたんか、三角に折って膝の上に敷いていた。

「「「いただきます」」」

なんとなく、揃って手を合わせてから食事が始まった。いくら気が抜けて普段どおりの自分でいられるとはいえ、これから先にどんな話があるのかといういろいろ考えてたら、やつぱり無口になってまう。女性陣も同じみたいで、しばらくはカチャカチャ、とゆう食器とスプーンとがかち合う音しか響かんかった。けど。

「……私の昔好きだった人も、タイキみたいに食事は大切だって言う人だったのよねえ」

サクさんが、ぽつりと呟いた。俺は、なんかデジャビュってゆうのかな。前にも同じような発言を聞いたような気がして、ふっと顔をあげる。サクさんは、なんてゆうか懐かしそうな、悔しそうな表情を浮かべていて。

加奈さんは、そんなサクさんの顔をじっと凝視しとった。

第18話（後書き）

あけましておめでとうございます！！ 今年もよろしくお願いいたします。

更新頻度については……もはや何もありません。

もしも万が一にお待ちくださった方がいらっしゃったのならば。

ありがとうございます……！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3344a/>

You and I.

2010年10月21日21時27分発行